

八坂誌

乾

特72

179

301721-001-8

特72-179

八坂誌 乾坤

八坂神社

M39.7

ADB-0001



師
子

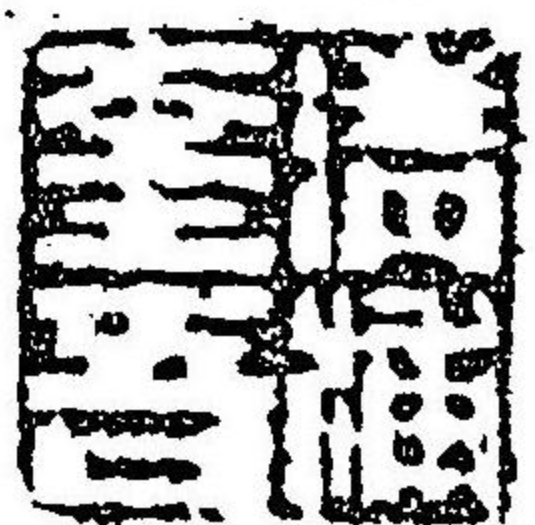
特 72
179



79W28703

明正丙午歲

李廷秀



神威
名

正位
白仁
武

西華

萬法統
於一

明法西平書

考考題



八坂誌の序

神宮壽壽ぬし曩に八坂神社の宮司に任せられその赴任の當初より八坂誌を編纂せむと日夜志を傾け朝夕思を凝らし廣く材料を蒐集してこれを國史記録地誌等に徵證し以て予に修訂を乞はる予編者の至誠を感じ第壹卷より編成る毎に順次勘修し事實の疑はしきはこれを他書に校へ徵證の足らざるはこれを藏書に補ひなどして遂にこれが完成を見るに至りぬいでや八坂神社に係る書世にいと多く見ゆめるもかゝる正確なるはいまだ有らざるべく覺

ゆるも編者が勞苦のいみじかりしを推想せられぬ
べしそもく、祇園精舎の鐘の響は明治の維新と共
に改まりて世に聞えわたらぬも神の御稜威は天地
の遠く長く東山の高く久しく變はるべからぬもの
にしあれば開け行く大御代のまにく、あらはれ行
きぬべき理なるからに此誌のかく成れるも亦神な
がらならむかしと悦ばしきに序文をもそへてよと
こへるによりてそのよし聊かかきしるすになむ

明治三十六年

從六位 井上頼國

神社の由緒記は鎮座以來の沿革を明かにし其神社
の位格并に其神社と國家等との關係を示すものな
り又祭神記は祭神の功業偉績を明かにし其奉祀は
報本反始の大禮たる所以を表はすものにして此の
兩記類の神社に執りて必要缺くへからざる書たる
ことなるが之と同時に右兩記類は參拜者に執りて
も其敬神愛國の志想を養成する上に於て大なる益
あるものなりと信するなり殊に近來教育普及の結
果として若きものも賤きものも文字を解するに至
りしかば右兩記類の必要と効益とは益々廣く大と

なりしは是亦云ふ迄もなきことにこそあるなれ客
年神宮氏京都八坂神社に赴任せらるゝや直ちに此
等の書の編纂に着手し爾來勉強漸く今日に到り完
結を告げ將さに八坂誌と題して之れを上梓せられ
んとすといふこれ實に前記の須要と効益とを充た
すものにて適切の舉なりといはざるべからず余未
だ之を一讀するの閑を得ずと雖も其美學の成れる
を贊稱するの餘り不文をも省みす一言を述へて序
文に代ふるものなり

明治三十六年冬十一月

法學士 中川友次郎

緒言

事實の多くして書傳の少きは古今の通則なり虚説
の傳はり易くして實傳の弘まり難きは内外の定弊
なり八坂神社の傳及同社祭神の御事等に係るもの
書傳少からずと雖も大約浮説の傳播以後に成りた
る書のみにして偶能く辯じ盡したるが如きものあ
るも虚説の原由を看破して更に熟讀すれば毎に隔
靴搔癢の感に打たれざるはあらず其主なるものを
創立の起原なりとす八坂造の祖なる伊利之使主の
事武内宿禰の孫なる紀朝臣百繼の事先是等の逸事

を知らざる者は概して創立を貞觀年中の事なりと爲す其錯謬は一轉して僧の圓如が播磨の廣峯より勸請したるものなりと爲し再轉して祇園精舎の守護神たる天竺の牛頭天王を鎮祭すと説く今の時に方りて舊説の錯謬を覈さざれば内外諸人の八坂神社の事及同社祭神の御事等を書に著して遠く謬傳を後世に流がさむは道理の觀易き所なり然して事態一社の上に止まらず全國一般の八坂神社皆繋れり是今回此誌の編纂に必要を感ずる所以の一なり次に觀慶寺てふもの感神院の外にありて祇園の宮

寺なりと稱し寺中に天神堂あり殿宇の構造祭神の神號並感神院と異ならず又後には双方別當職ありて共に延曆寺の配下たり兩別當兼務して後觀慶寺焼亡し終に廢寺となりて別當私權を感神院に振ひ恣に社傳を轉倒して觀慶寺の寺號を感神院の本名の如くし瞞着百端の結果種々の書傳を差はしめたり是を以て或は日吉の末社なりしと記したる書あり或は延曆寺の別院なりしと書きたる文あり因循久しく其薰蕕を別つことなくば誤謬一進して或は弊を社格の上に及ぼし再進して或は害を禮典上に

八
被らじめむ是今回此誌の編纂に必要を感ずる所以
の二なり次に吉備眞備が捏造作爲の曆神説に由り
五節句の行はれしこと流れて久し殊に後人が名を
眞備に假り簠簋内傳を作りて以來海内擧げて牛頭
天王を天道神なりと誤解し儒者は之を唐より渡り
て播磨に着し東光寺を経て祇園の荒町に遷され更
に感神院に遷されたるものなりと説き智者は端な
くも假説方便的淫祀なりと想ひ愚者は本地薬師如
來の垂跡なりと信ず今若之を等閑に附し鹵莽滅裂
して人智漸進一天を掩ふに至らば他日何者か眞の

牛頭天王を識らむ朝鮮國慶尙道樂浪郡に牛頭山あ
り牛頭は韓語の曾尸茂利にして曾尸茂利に素盞鳴
尊の天降りたまひし傳は我にあり該地に降りし神
人を開闢元始の君として祭りたる傳は彼にあり然
れば調進副使伊利之使主が歸化するに際して素盞
鳴尊を八坂に鎮祭し牛頭山天王と尊稱敬拜したる
社傳は信憑すべき價值あり然れども彼我の原文を
對照列擧し着々社傳を補ふにあらざれば世人廣く
之を曉らず人覺らざれば何を以て舊染汚俗を脱却
せしめむ是今回此誌の編纂に必要を感ずる所以の

三なり次に八坂神社は王城の鎮護として古く臨時の奉幣に預り且夫六月十五日の臨時祭は其由來する所遠く貞觀の疾疫除却と天慶の賊亂鎮遏とにありて維新以來の官祭も竟に是日を以て定日とせらる尙且全國中至る處に素盞鳴尊を祭り牛頭天王と尊びて祇園會を行ふ其典其式一として八坂神社に倣はざるはなし必理由なかるべからず是今回此誌の編纂に必要を感じずる所以の四なり次に全國中渡御祭執行の神社多しと雖も其盛大にして宇内絶美の壯觀なりと稱すべきもの八坂神社の祇園會に及

くはなし必理由なかるべからず是今回此誌の編纂に必要を感じずる所以の五なり次に祇園會の山鉾は昔に巨額の財を消費して善美を盡したるに止まらず廣く内外の古事を摸し又其所出の緣起に因る其事各町所藏の記録に詳なりと雖も未公刊の書に登らざるを以て人之を知らず是今回此誌の編纂に必要を感じずる所以の六なり次に年中の神事祭式皆淵源ありて由緒を存す然れども行事記載の外は別に公刊の傳書なきを以て世人皆之を詳知せず是今回此誌の編纂に必要を感じずる所以の七なり以上の七

感情積りて一百七十一部の考證と爲り發して十八卷の本文と成る是に廣く世上に傳へて感夢を覺まし長く國家に遺して敬神の柱石に供ふと云爾

明治三十六年七月

編纂主任 神宮鬮壽 識

題 八坂誌

汗青事業仗誠忠。	豈但毫端氣吐虹。
萬古深稽聖神跡。	一絲不紊歷朝風。
巍巍廟貌皇都鎮。	凜凜戈矛日域雄。
合有新編裨世教。	仰欽德威益隆崇。

丙午三月

官幣中社八坂神社宮司

正七位 勳七等

保科保

八坂誌目次

乾之部

卷之一

創立起原の事

一頁

卷之二

祭神の御傳

三頁

卷之三

社殿沿革の事

二十五頁

卷之四

年中神事祭式の事

二十九頁

卷之五

歴朝崇敬の事

四十三頁

卷之六

一

臣下尊崇の事

六十九頁

卷之七

走馬奉納の濫觴

七十九頁

卷之八

臨時祭の事

八十五頁

卷之九

行幸及御幸行啓の事

百五頁

卷之十

祇園會張弛の事

百十一頁

卷之十一

神輿洗の事

百四十三頁

卷之十二

御旅所の事

百四十九頁

坤之部

卷之十三

神幸行列の事

一頁

卷之十四上下

祇園會山鉾の事

二十三頁

卷之十五

境内境外攝末社の事

七十七頁

卷之十六

大神人の事

九十七頁

卷之十七

鬪諍禍亂の事

百七頁

卷之十八

廢觀慶寺の事

百二十九頁

附錄

八坂神社考抄
以上

百四十一頁

四

八坂誌目次終

八坂誌考證書目

保元物語

日本書紀

簾中抄

古事記

東國通鑑

備後國風土記

八坂社舊記集錄

倭名類聚抄

古語拾遺

八坂鄉御鎮座大神記

一代要記

玉藥

五

扶桑略記
百練抄
本朝世紀
吉部秘訓抄
後法興院記
應仁略記
京都御役所向大概覺書
神祇官達書
本朝編年錄
建內氏本系帳
本朝通鑑
祇園社記
法眼晴顯記

中臣祓卜部抄
日本紀略
二十二社注式
諸國圖會年中行事大成
年中行事秘抄
公事根源
日吉山王二十一社新記
小右記
中右記
祇園社本緣錄
永昌記
師遠年中行事
師光年中行事

年中行事抄

吹塵錄

禁秘御抄

夕拜備急至要

拾芥抄

江家次第

桂史抄

執政所抄

台記

愚昧記

兵範記

吉記

玉海

世々樞覽

葉黃記

吉續記

社記續錄

園太曆

康富記

筑前國續風土記

石城志

祇園社執行日記

後愚昧記

雍州府志

雜談抄

毘沙門天功德經

更々俗日記

年中行事秘錄

奇遊談

京雀

曾呂里狂歌咄

安齋隨筆

倭漢三才圖會

祇園會細記

舊書群載

豐臣秀吉家譜

太閤記

閑田耕筆

山城名勝志

藝苑日涉

祇園御鎮座本記

珍珠船

神事記

濫觴抄

後拾遺和歌集

水左記

爲房卿記

長秋記

十三代要略

明月記

八坂神社目誌

御旅所社家記

拾遺都名所圖會

山州名跡志

祇園社舊記

花營三代記

京城萬壽寺記

兼邦神道和歌注

京町鑑

都名所圖會

殿曆

天台座主記

歷代皇紀

續古事談

東鑑

帝王編年記

太平記

皇年代略記

觀音寺相國記

崇德院御記

山槐記

公茂公記

故實一端

管見記

建內記

成氏年中行事

師卿記

季瓊日錄

年中定例記
應仁前記
蟻川親元日記
貞丈雜記
齋藤親基日記
蔭涼軒目錄
宣胤卿記
親長卿記
忠富王記
拾芥記
三水記
梵舜日記
皇年代私記

都行脚
倭漢合運指掌圖
八坂神社明細圖書
次嶺經
祇園會起源
皇都珍聽記
更雜日記
惡王子社記
山城志
京師巡覽集
神社便覽
京羽三重織留
日次紀事

扁額軌範

本朝神社考

祇園社宮仕方記錄

祇園社年中行事

感神院記錄

感神院舊記

舊社務寶壽院內奏願文

類聚符宣抄

二十二社本緣

鳩嶺雜日記

四季物語

建武年中行事

法成寺攝政記

諸神記

顯廣王記

薩戒記部類私要抄

人車記

尺素往來

祇園會記錄

月鉾町祇園會記錄

武家目次記

長刀鉾諸記錄

犬鷹鉾之町

八坂神社祭禮行列案内

長刀鉾町一枚摺

長刀鉾飾卷物

泉親平贊

八坂神社調書

以上

●編者云此書目は引證の順序に依り作成したるものにして書の成りたる時の新古には拘らず

八坂誌考證書目終

八坂誌卷一

創立起原の事

齊明天皇の即位二年八月韓國の調進副使伊利之使主新羅の牛頭山にます素蓋鳴尊を始めて八坂に齋奉れり時に紀元一千三百十六年なりき

(日本書紀) 齊明天皇卷 二年秋八月癸巳朔庚子高麗遣達沙等進調 大使達沙副使 伊利之摠八十一人

(八坂郷鎮座大神記) 齊明天皇即位二年丙辰八月韓國調進副使伊利之使主再來之時 新羅國牛頭山座須佐之雄尊之神御魂齋祭來而皇國祭始依之愛宕郡賜八坂郷並八坂造之姓

(新撰姓氏錄二十五山城國諸蕃高麗部) 八坂造伯國人萬留川麻乃意利佐之後也

八坂誌卷二

祭神の御傳

伊弉諾尊伊弉册尊共に議曰く吾已に大八洲國及山川草木を生めり
 何にぞ天下の主とますべき者を生まざらむと是に共に日神を生み
 まつります大日靈貴と號す此子光華明彩しくましまして六合の内
 に照徹したまふ是は天照大神なり次に月神を生みまつります其光
 彩日に亞ぐ是は月讀尊なり次に素盞鳴尊を生みまつります伊弉諾
 尊三子に勅曰く天照大神は高天原を治しめせ月讀尊は滄海原潮の
 八百重を治しめせ素盞鳴尊は天下を治しめせと任したまひき是時
 素盞鳴尊年已に長け八握鬚生ひたり然れど天下を治しめさずて
 常に啼泣ち悲恨みたまふ故伊弉諾尊汝は何故て恒に如此啼くやと
 問ひたまへば吾は母のます根國に従かむと泣くなりと對曰しぬさ

れは情の任に行ねどのりたまひて逐ひましき是に素盞鳴尊吾今教
を奉けて根國に就かむに暫高天原に向ひて姉と相見て後永く退り
なむと請曰して天に昇ります時溟渤鼓盪き山岳鳴响は此は神
性の雄健きなり天照大神驚きて曰く吾弟の來まさむこと豈善しき
意ならむや謂ふに國を奪はむ志有るべしとのりたまひて髮を結ひ
て髻と爲し裳を縛りて袴と爲し便八坂瓊の八百箇の御統を其髻鬘
及腕とに纏き又背に千箇の鞞と五百箇の鞞とを負ひ臂に稜威の高
鞞を着け弓櫛振起て劍の柄急握り堅庭は股に踏陷み沫雪若す蹙散
し稜威の雄詰を奮し稜威の噴讓を發して徑に詰問ひたまへば素盞
鳴尊對へて吾元より黒き心無し但父母已に嚴勅有りて永く根國に
就かむに如姉と相見ずて吾何で能く敢て去らむ是を以て雲霧を跋
涉りて遠くより參來にけるを不意くも阿姉翻に嚴顔を起しつるか
もとまをしぬ時に天照大神若し然らば何を以て爾が赤き心を明さ

むと問ひたまへば姉と共に誓せむには夫誓約の中に必子生れます
べし如吾生さむ子女ならば濁き心有りと爲せ若男ならば清しき心
有りと爲せとまをしぬ是に天照大神素盞鳴尊の十握劍を索取りて
三段に打折りて天真名井に濯ぎて齧然に嚼みて吹棄つる氣噴の狭
霧に生れませる神の號は田心姫次に湍津姫次に市杵島姫凡て三の
女にます既にして素盞鳴尊天照大神の髻鬘と腕とに纏かせる八坂
瓊の五百箇の御統を乞取りて天真名井に濯ぎて齧然に嚼みて吹棄
つる氣噴の狭霧に生れませる神の號は正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊
是は天皇の太祖にます次に天穗日命次に天津彦根命次に活津彦根
命次に熊野櫛日命凡て五の男にます是時天照大神勅曰く其物根
を原ぬれば八坂瓊の五百箇の御統は吾物なり故彼五の男神は悉に
吾兒なりとのりたまひて取りて子養したまひき又勅曰く其十握劍
は素盞鳴尊の物なり故此三の女神は悉に爾が兒なりとのりたまひ

て便素盞鳴尊に授けたまふ是に素盞鳴尊天照大神に我心清く明きが故に我手弱女を得つ此に因て言さば自我勝ちぬとまをして勝さびに春は重播種子し且其畔を毀ち秋は天班駒を田に伏せ復天照大神の新嘗聞看す時には新宮に放戻り又神衣を織らむとして齋服殿に居すを見ては天班駒を剥ぎて殿の豊を穿ちて投納れたまふ是時天照大神驚きて梭を以て身を傷りたまふ此に由て愠りまして乃天石窟に入りて磐戸を閉て幽居しき諸神罪を素盞鳴尊に飯せ千座置戸を科せて逐ひます時に霖ふる素盞鳴尊青草を結束ねて笠篋を爲り宿を衆神に乞ひたまふに衆神距ぎし是を以て風雨甚しかれども留休まで辛苦めつし降ります又食物を大氣津比賣神に乞ひたまふに大氣都比賣鼻口及尻より種々の味物取出て種々作具へて進る時に素盞鳴尊其態を立伺ひて穢汚奉ると爲して乃其大宜津比賣神を殺したまひき素盞鳴尊其子五十猛神を帥て新羅國に降到り曾戸

茂梨の地に居す其國初君無し神有りて檀木下に降りますを國人立てし君と爲し檀君と稱す素盞鳴尊遂に國を開きたまひぬ國號を朝鮮といふ素盞鳴尊韓郷の島は金銀有り若吾兒の御さむ國に浮寶有らずは佳からじとのりたまひて乃杉檜被櫛樟を成し杉と櫛樟とを以て浮寶を爲れ檜を以て瑞宮を爲れ被を以て奥津棄戸の具を爲れと教へて木種を皆能く播かしめたまひき素盞鳴尊の子五十猛命大屋津姬命抓津姬命凡て三神も能く木種を布ち紀伊國に渡ります五猛神は多くの樹種を持歸りまして遂に筑紫より始めて大八洲の國內に播植ゑて青山成しき所以に有功神と稱奉る素盞鳴尊乃興言し曰く此地には吾居らまく欲せずとのりたまひて遂に埴土を以て舟を作り乗りて東に渡りましき是に素盞鳴尊南海神の女を喚に出でますに日暮れたり其處に二人在りき兄を佐味縣守と云ふ甚貧し弟を小田縣守と云ふ富みて屋舎一百在りき爰に素盞鳴尊宿を借り

たまふに惜みて貸さず佐味縣守貸しまつり即栗柄を以て座と爲し
栗飯なを奉りて饗奉りぬ既にして素蓋鳴尊出でたまひき後に年經
て八柱の子を率て還來まして詔く我報答せむとおもへり汝子孫在
りやと問ひたまふに予佐味縣守答へて己女と斯婦と侍りとまをし
しかば茅を以て輪を爲りて腰上に着けよとのたまふに予詔の隨に
着けしかば即夜に佐味縣守と女人二人とを除きて悉に殺されき即
詔く吾は速素蓋鳴神なり疫氣在らば汝が子孫と云ひて茅輪を腰上
に着けよ詔の隨に着けしめなば即家なる人は免れむと詔ひき茅輪
を爲りて疫病の禁厭するは其縁起なり又蘇民將來といへるは佐味
縣守を錯てるなり素蓋鳴尊出雲國の簸川上に到りたまへる時脚摩
乳手摩乳の二人其女櫛稻田姫が八岐大蛇に吞まれむことを傷みて
哭けり故素蓋鳴尊湯津爪櫛を御髻に挿し脚摩乳手摩乳に八醞酒を
醸み假殿八門を作らせ門ごと槽を置き酒を盛りて待ちたまふ期

至れば果大蛇有り頭八尾八有りて眼は赤酸醬如し松栢背上に生ひ
八丘八谷に蔓延れり槽ごと其頭を入れ酒を飲みて醉睡る時に素
蓋鳴尊乃帶かせる十握劍を抜きて其蛇を寸に斬りたまふ尾に至り
て劍の刃少缺けき故其尾を割きて視そなはしたまへば中に一の劍
有り此は謂ゆる草薙劍なり本名は天叢雲劍其は大蛇の居る所の上
常に雲氣有り故名く日本武皇子の時に至りて草薙劍と改む今尾張
國の熱田神宮に在り謂ゆる三種の神器中の一なり彼大蛇を斬りた
まひし劍は蛇の籠正と曰ふ今大和國の石上神宮に在り是に素蓋鳴
尊是は神しき劍なり吾何で私に安けらむとのりたまひて天照大神
に上りたまふ其後素蓋鳴尊宮造るべき地を出雲の國內に求ぎたま
ひ須賀地に到りまして詔く吾此地に來まして我御心清清しとのり
たまひて其地に宮作りて坐しき故其地を須賀と云ふ茲に素蓋鳴尊
初須賀宮を作りたまへる時其地より雲立騰りき爾御歌作し曰く夜

久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻基微爾夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐
袁是に其脚摩乳を喚して汝は稻田宮主須賀之八耳神と名負ひて我
宮の首たれと告ひ又櫛稻田姫命を妃と爲して八島篠見神を生みま
す又素盞鳴尊大山津見神の女神大市比賣命に娶ひまして大年神を
生みます次に宇迦之御魂神を生みます然して後に素盞鳴尊は熊成
峯に居して遂に根國に入りましき熊成は任那國下嗚呼利縣の別號
なりと云ふ八島篠見神は布波能母遲久奴須奴神を生みたまふ此布
波能母遲久奴須奴神の子深淵之水夜禮花神此深淵之水夜禮花神の
子游美豆奴神此游美豆奴神の子天之冬衣神此天之冬衣神の子大國
主神亦の名は大物主神亦の名は國作大已貴命亦の名は葦原醜男神
亦の名は八千戈神亦の名は大國玉神亦の名は顯國玉神其子凡て一
百八十一神ましき此神多くの庶兄弟の神等に族まれたまふ是に御
母命告く素盞鳴尊の坐す根國に參向は必其大神議りたまはむと

のたまひき故詔の隨に參到りたまひしかば素盞鳴尊詔曰く生大刀
生弓矢以て汝が庶兄弟をば坂の御尾に追伏せ河の瀬に追撥ひて你
大國主神と爲り又顯國玉神と爲れ其我女須勢理毘賣を嫡妻と爲し
て宇迦山の山本に大宮建て居れ是奴よこのたまひき故詔の隨に
して國作りたまひ遂に顯露事を皇孫に避奉り瑞の八坂瓊を披きて
長く八十垵手に隠侍ひましき須勢理毘賣神は西の間に齋奉る神な
り朝鮮の國人牛頭山に神宮を興し恒に素盞鳴尊の神靈を齋奉る牛
頭山は企今皇弓なり慶尙道樂浪郡にあり初素盞鳴尊の天降りたま
ひし處後に弓咎皇弓と云ふ弓咎皇弓は最大の義なり猶後には訛りて
弓咎皇と云ふ雄略天皇の廿年高麗王軍兵を發して百濟を攻め百濟
國殆に危かりき是に天皇神祇伯に命せて策を神祇に受けたまふに
祝者託神して語りけらくは屈みて邦を建てし神に請ひ往きて亡び
むとする主を救は必國安かりなむとなり是を以て二十一年三月

素盞鳴尊に請奉り久麻那利を賜ひ百濟を救興す其後百濟牛頭山の
神宮を輟て祀らざりき欽明天皇の十五年百濟又新羅の爲に逼め
られ聖明王終に斬らる十六年二月王子餘昌其弟惠を遣して聖明王
の殺されたることを奏しよかは前の過を懊悔いて神宮を修理し神
靈を祭奉らば國盛になむ汝怠ること莫かるべしと諭しぬ斯る故實
の有るに由りてや齊明天皇の二年八月に調進副使として來朝せし
高麗の伊利之使主彼牛頭山に坐す素盞鳴尊の御魂を山城國愛宕郡
八坂郷に齋奉り牛頭山に坐す大神なるを以て牛頭天王と稱奉りき
此故實に因りて八島篠見神五十猛神大屋比賣神抓津比賣神大年神
宇迦之御魂神大屋毘古神須勢理毘賣命櫛稻田姬命神大市比賣命佐
美良比賣命の十一神をも同殿中東西の兩座に齋奉り又稻田宮主須
賀之八耳神をも配祀れり凡て三座十三前なり

(保元物語一) 此京ハ桓武天皇ノ御宇延曆十三年十月二十二日長岡京ヨリ遷サレテ

後弘仁元年九月十日平城先帝世ヲ亂リ給シカドモ此京ハ無爲也其後帝王二十五代
星霜三百四十七年ノ春秋ヲ送レリ其間ニモ朱雀院ノ御宇ニハ將門純友東西ニ亂逆
テナシ後冷泉ノ御世ニハ貞任宗任兄弟謀反ヲ企或ハ八ヶ國ヲ從ヘテ八ヶ年合戦シ
或ハ陸奥ニ支テ十二年迄防戦シカドモ敢テ都ノ亂ニナラズ終ニ皇化ニ遵ヒキ去ハ
今モ誰人カ此京ヲ滅シ何者カ我君ヲ傾ケシ南ニハ正八幡大菩薩男山ニ跡ヲ垂テ京
都ヲ守リ北ニハ賀茂大明神天滿天神東西ニハ稻荷祇園松尾大原野等光ヲ雙ベテ日
夜ニ結番シ禁圍ヲ守リ給フ縦逆臣亂ヲナストモ爭カ靈神ノ助ナカルベキ
(日本書紀神代卷上) 伊弉諾尊伊弉册尊共議曰吾已生大八洲國及山川草木何不生天
下之主者歟於是共生日神號大日靈貴此子光華明影照徹於六合之内故二神喜曰吾息
雖多未有若此靈異之兒不宜久留此國自當早送于天而授以天上之事是時天地相去未
遠以天柱舉於天上也次生月神其光彩亞日可以配日而治故亦送之于天云々次生素盞
鳴尊

(日本書紀神代卷上一書) 伊弉諾尊勅任三子曰天照大神者可以治高天原也月讀尊者
可以治滄海原潮之八百重也素盞鳴尊者可以治天下也是時素盞鳴尊年已長矣復生八
握鬚尊雖然不治天下常以啼泣恚恨故伊弉諾尊問之曰汝何故恒啼如此耶對曰吾欲從

母於根國只爲泣耳伊弉諾尊惡之曰可以任情行矣乃逐之

〔日本書紀神代卷上〕於是素盞鳴尊請曰吾今奉敕將就根國故欲暫向高天原與姉相見而後永退矣勅許之乃昇詣之於天也云々始素盞鳴尊昇天之時溟渤以之鼓盪山岳爲之嗚响此則神性雄健使之然也天照大神素知其神暴惡至聞來詣之狀乃勃然而驚曰吾弟之來豈以善意乎謂當有奪國之志歟夫父母既任諸子各有其境如何棄置當就之國而敢窺窬此處乎乃結髮爲髻縛裳爲袴便以八坂瓊之五百箇御統纏其髻髮及腕又背負千箭之數臂着稜威之高柄振起弓彌急握劍柄陷堅庭而陷股若沫雪以釐散奮稜威之雄詭發稜威之噴讓而徑詰問焉素盞鳴尊對曰吾元無黑心但父母已有嚴勅將永就乎根國如不與姉相見吾何能去是以跋涉雲霧遠自來參不意阿姉翻起嚴顏于時天照大神復問曰若然者將何以明爾之赤心也對曰請與姉共誓夫誓約之中必當生子如吾所生是女者則可以爲有濁心若是男者則可以爲有清心於是天照大神乃索取素盞鳴尊十握劍打折爲三段濯於天真名井結然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號曰田心姬次湍津姬次市杵鳥姬凡三女矣既而素盞鳴尊乞取天照大神髻髮及腕所纏八坂瓊之五百箇御統濯天真名井結然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號曰正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊次天穗日命次天津彥根命次活津彥根命次熊野櫛樟日命凡五男矣是時天照大神勅曰原其物根則八坂

瓊之五百箇御統者是吾物也故彼五男神悉是吾兒乃取而子養焉又勅曰其十握劍者是素盞鳴尊物也故此三女神悉是爾兒便授之素盞鳴尊

〔籠中抄二〕帝王御次第 正哉勝勝速日天忍穗耳尊 あまてるかほんかみとかとゝそさのをのみことゝとにして化生したまへり

〔古事記上〕爾速須佐之男命白于天照大神我心清明故我所生之子得手弱女因此言者自我勝云而於勝佐備離天照大神神之營田之阿埋其溝亦云々

〔日本書紀神代卷上〕天照大神以天狹田長田爲御田時素盞鳴尊春則重播種子且毀其畔秋則放天班駒使伏田中復見天照大神當新嘗時則陰放屎於新宮又見天照大神方織神衣居齋服殿則剝天班駒穿殿費而投納是時天照大神驚動以梭傷身由此發愠乃入于天石窟閉磐戶而幽居焉云々然後諸神歸罪過於素盞鳴尊而科之以千座置戶遂云々逐降焉

〔日本書紀神代卷上一書〕于時霖也素盞鳴尊結束青草以爲笠篋而乞宿於衆神衆神曰汝是躬行濁惡而見逐謫者如何乞宿於我遂同距之是以風雨雖甚不得留休而辛苦降矣〔古事記上〕又食物乞大氣津比賣神爾大氣都比賣自鼻口及尻種種味物取出而種種作具而進時速須佐之男命立伺其態爲穢汚而奉進乃殺其大宜津比賣神故所殺神於身生

物者於頭生蠶於二目生稻種於二耳生粟於鼻生小豆於陰生麥於尻生大豆故是神產巢

日御祖神命令取茲成種

(日本書記神代卷上一書) 是時素盞鳴尊帥其子五十猛神降到於新羅國居曾尸茂梨之處

(東國通鑑一) 東方初無居長有神人降于檀木下國人立為君是為檀君國號朝鮮

(日本書記神代卷上一書) 素盞鳴尊曰韓鄉之鳥是有金銀若使吾兒所御之國不有浮寶者未是佳也乃拔鬚散之即成杉又拔散胸毛是成檜尻毛是成椈眉毛是成椈樟已而定其當用乃稱之曰杉及椈樟此兩樹者可以為浮寶椈可以為瑞宮之材椈可以為顯見蒼生奧津棄戶將臥之具夫須斂八十木種皆播生于時素盞鳴尊之子號曰五十猛命妹大屋津姬命次抓津姬命凡此三神亦能分布木種即奉渡於紀伊國也

(日本書記神代卷上一書) 初五十猛神天降之時多將樹種而下然不植韓地盡以持歸遂始自琉紫凡大八洲國之內莫不播植而成青山焉所以稱五十猛命為有功之神

(日本書記神代卷上一書) 素盞鳴尊云々乃與言曰此地吾不欲居遂以埴土作舟乘之東渡

(備後國風土記) 疫隅國社昔北海坐志武塔神南海神之女子乎與波比爾出坐爾日暮多

利所仁將來二人在伎兄蘇民將來止云甚貧窮弟巨且將來止云富饒屋舍一百在伎爰仁武塔神借宿處仁惜天不借兄蘇民將來借奉留即以粟柄為座以粟飯等饗奉流饗奉既畢武塔神出坐後爾經年率八柱子還來天詔久我將奉之為報答汝子孫在哉問給蘇民將來答申久已女子與斯婦侍止申即詔久以茅為輪令着於腰上隨詔令着即夜爾蘇民與女人二人乎置天皆悉久許呂志保呂保志天伎即詔久吾者速須佐能雄神也疫氣在者汝蘇民將來之子孫止云天以茅輪着腰上隨詔令着即家在在者將免止詔伎

(倭名類聚抄) 備中國小田郡小田乎多備後國葦田郡佐味 (參考)

(日本書紀神代卷上) 是時素盞鳴尊自天而降到於出雲國簸之川上時聞川上有啼哭之聲故尋蹤覓往者有一老公與老婆中間置一少女撫而哭之素盞鳴尊問曰汝等誰也何為哭之如此耶對曰吾是國神號脚摩乳我妻號手摩乳此童女是吾兒也號奇稻田姬所以哭者往時吾兒有八箇少女每年為八岐大蛇所吞今此少童且臨被吞無由脫免故以哀傷素

蓋鳴尊勅曰若然者汝當以女奉吾耶對曰隨勅奉矣故素盞鳴尊立化奇稻田姬為湯津爪
櫛而插於御髻乃使脚摩乳手摩乳釀八醞酒并作假殿八間各置一口槽而盛酒以待之也
至期果有大蛇頭尾各有八岐眼如赤酸醬松栢生於背上而蔓延八丘八谷之間及至得酒
頭各一槽飲醉而睡時素盞鳴尊乃拔所帶十握劍寸斬其蛇至尾劍刃少缺故割裂其尾視
之中有一劍此所謂草薙劍也素盞鳴尊曰是神劍也吾何敢私以安乎乃上獻於天神也然
後行覓將婚之處遂到出雲之清地焉乃言曰吾心清清之於彼處建宮

(日本書紀神代卷上注) 一書曰本名天叢雲劍蓋大蛇所居之上常有雲氣故以名歟至日
本武皇子改名曰草薙劍

(日本書紀景行天皇卷注) 一云王所佩劍叢雲自抽之薙攘王之傍草因是得免故號其劍
曰草薙也

(日本書紀神代卷上一書) 素盞鳴尊拔劍斬之至斬尾時劍刃少缺割而視之則劍在尾中
是號草薙劍此今在尾張國香湯市村即熱田祝部所掌之神是也其斷蛇劍號曰蛇之龜正
此今在石上也是後以稻田宮主篁狹之八箇耳生兒真髮觸奇稻田媛遷置於出雲國兼川
上而長養焉然而素盞鳴尊以為妃而所生兒之六世孫是曰大己貴命

(古事記上) 故是以其速須佐之男命官可造作之地求出雲國爾到坐須賀地而詔之吾來

此地我御心須賀須賀斯而其地作宮坐故其地者於今云須賀也茲大神初作須賀宮之時
自其地雲立騰爾作御歌其歌曰夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻基微爾夜幣賀岐都久
流曾能夜幣賀岐袁於是喚其足名稚神告言汝者任我宮之首且負名號稻田宮主須賀之
八耳神故其櫛名田比賣以久美度邇起而所生神名謂八島士奴美神又娶大山津見神之
女神大市比賣生子大年神次宇邇之御魂神兄八島士奴美神娶大山津見神之女名木花
知流比賣生子布波能母邇久奴須奴神此神娶淤邇美神之女名日河比賣生子深淵之水
夜禮花神此神娶天之都度閉知泥神生子淤美豆奴神此神娶布怒豆怒神之女名布帝耳
神生子天之冬衣神此神娶刺國大神之女名刺國若比賣生子大國主神亦名謂大穴牟遲
神亦名謂葦原色許男神亦名謂八千矛神亦名謂宇都志國玉神

(日本書紀神代卷上一書) 大國主神亦名大物主神亦號國作大己貴命亦曰葦原醜男亦
曰八千戈神亦曰大國玉神亦曰顯國玉神其子凡有一百八十一神

(日本書紀神代卷上一書) 然後素盞鳴尊居熊成峯而遂入於根國者矣

(日本書紀雄略天皇卷) 二十一年春三月天皇聞百濟為高麗所破以久麻那利賜汶洲王
救與其國 (參考)

(同注) 久麻那利者任那國下哆呼縣之別邑也 (參考)

(東國通鑑一) 東方初無君長有神人降檀木下國人立為君是為檀君國號朝鮮是唐堯戊辰年也初都平壤後徙白岳至商武丁八年乙未入阿斯達山為神 (參考)

(古事記上) 御祖命告子云可參向須佐能命所坐之根堅洲國必其大神譏也隨詔命而參到須佐能之男之御所者其女須勢理毘賣出見為目合而相婚還入白其父言甚麗神來爾其大神出見而告此者謂之葦原色許男即喚入而令寢其蛇室

(古事記上) 故爾追至黃泉比良坂遙望呼謂大穴牟遲神曰其汝所持之生大刀生弓矢以汝庶兄弟者追伏坂之御尾亦追撥河之瀬而意禮為大國主神亦為宇都志國玉神而其我之女須世理毘賣為嫡妻而於宇迦能山之山本於底津石根宮柱布刀斯理於高天原冰椽多迦斯理而居是奴也故持其大刀弓追避其八十神之時每坂御尾追伏每河瀬追撥而始作國也

(日本書紀神代卷上一書) 大已貴命與少彥名命戮力一心經營天下復為顯見蒼生及畜產則定其療病之方又為撰鳥獸昆蟲之災異則定其禁厭之法是以百姓至今咸蒙恩賴

(古語拾遺) 天照大神高皇產靈尊崇養皇孫欲降為豐葦原中國主仍遣經律主神武甕槌神驅除平定於是大已貴神及其子事代主神並皆奉避仍以平國矛授二神曰吾以此矛卒有治功天孫若用此矛治國者必當平安今我將隱去矣辭訖遂隱

(古事記上) 僕子等二神隨白僕之不達此葦原中國者隨命既獻也唯僕住所者如天神御子之天津日繼所知之登陀流天之御巢而於底津石根宮柱布斗斯理於高天原冰木多迦斯理而治賜者僕者於百不足八十捫手隱而侍亦僕子等百八十神者即八重事代主神為神之御尾前而仕奉者違神者非也

(日本書紀神代卷上一書) 天神遣經律主神武甕槌神使平定葦原中國云々二神降到出雲五十田狹之小汀而問大已貴神曰云々於是大已貴神報曰天神勅教慙慙如此敢不從命乎吾所治顯露事者皇孫當治吾將退治幽事乃薦岐神於二神曰是當代我而奉從也吾將自此避去即躬披瑞之八坂瓊而長隱者矣

(日本書紀欽明天皇卷) 十六年春二月百濟王子餘昌遣王子惠奏曰聖明王為賊見殺天皇聞而傷恨迺遣使者迎津慰問於是許勢臣問王子惠曰為當欲留此間為當欲向本鄉惠答曰依憑天皇之德冀報考王之讎若垂哀憐多賜兵革雪垢復讎臣之願也臣之去留敢不唯命是從俄而蘇我臣問訊曰聖王妙達天道地理名流四表八方意謂永保安寧統領海西蕃國千年萬歲奉事天皇豈圖一旦眇然昇遐與水無歸即安立室何痛之酷何悲之哀凡在含情誰不傷悼當何咎致茲禍也今復何術用鎮國家惠報答之曰臣稟性愚蒙不知大計何況禍福所倚國家存亡者乎蘇我鄉曰昔在天皇大泊瀬之世汝國為高麗所逼危甚累卵於

是天皇命神祇伯敬受策於神祇祝者迺託神語曰屈請建邦之神往救將亡之主必當國家
謠靖人物又安由是請神往救社稷安寧原夫建邦神者天地剖判之代草木言語之時自天
降來造立國家之神也頃聞汝國輟而不祀方今倭海前過修理神宮奉祭神靈國可昌盛汝
當莫怠

(日本書紀雄略天皇卷) 二十年冬高麗王發軍兵伐盡百濟爰有少許遺衆聚居倉下兵糧
既盡茲憂泣深於是高麗諸將言於王曰百濟心許非常臣每見之不覺自失恐更蔓生請遂
除之王曰不可矣寡人聞百濟國者日本國之官家所由來遠久矣又王入仕天皇四隣之所
共識也遂止之 (參考)

(同注) 百濟記云蓋鹵王乙卯年冬狍大軍來攻大城七日七夜王城降陷遂失尉禮國王及
太后王子等皆沒敵手 (參考)

(日本書紀雄略天皇卷) 二十一年春三月天皇聞百濟爲高麗所破以久麻那利賜汝洲王
救與其國時人皆云百濟國雖既亡聚憂倉下實賴於天皇更造其國

(日本書紀齊明天皇卷) 二年秋八月癸巳朔庚子高麗遣達沙等進調

(同注) 大使達沙副使伊利之惣八十一人

(八坂鄉鎮座大神記) 齊明天皇即位二年丙辰八月韓國之調進副使伊利之使主再來之

時新羅國牛頭山座須佐之雄尊之神御魂齋祭來而皇國祭始依之愛宕郡賜八坂鄉並八
坂造之姓十二年後天智天皇御宇六年丁卯社號爲感神院宮殿全造營而牛頭山座之大
神乎牛頭天皇奉稱祭祀畢

(八坂鄉鎮座大神記) 奉齋御神名記 神速須佐乃男尊 中央座 櫛稻田媛命 東間

座 五男三女八柱神 西間座 五男三女御神名記 八鳥篠見神五十猛神大屋比賣

神抓津比賣神 此四座御母櫛稻田媛命 大年神宇迦之御魂神 此二座御母神大市

比賣命 大屋毘古神須勢理毘賣神 此二座御母佐美良比賣命 神大市比賣命 東

間同座 佐美良比賣命 同 稻田宮主須賀之八耳神 此神西間傍別座 合十三前

(八坂鄉鎮座大神記) 八坂鄉奉齋大神十三前記 第一 神速須佐之雄尊 中央座

亦御名 健速須佐之男命 神素盞鳴尊 速素盞鳴尊 武素盞鳴尊 伊佐那岐乃日

真名子加夫呂岐熊野大神櫛御氣野命 第二 櫛稻田姬命 東間座 亦御名 眞髮

觸奇稻田媛命 櫛名田比賣命 稻田宮主須賀之八耳神之女而須佐之男尊之御妃

第三 神大市比賣命 東間座 須佐能男命妻大山津見神之女名神大市比賣命生子

大年神次宇迦之御魂神 第四 佐美良比賣命 東間座 伊雜宮同座之神也 第五

八鳥篠見神 西間座 亦御名 清之繁名坂輕彥八鳥手神 清之湯山主三名狹漏

彦八島篠神、八島士奴美神、第六、五十猛神、同座、亦御名、大屋毘古神、伊太
 祁曾神、五十猛有功之神、第七、大屋比賣神、同座、亦御名、大屋津比賣命、第
 八、抓津比賣神、同座、此五十猛神大屋津比賣命抓津比賣神三神紀國所座之大神
 也、第九、大年神、西間座、亦御名、大葦御祖命、第十、宇迦之御魂神、同座
 此神者與神代紀所謂伊弉諾尊之兒倉稻魂命爲同名異神矣不可混也、第十一、大屋
 毘古神、同座、亦御名、粟皇子道主命、神乎多命、此神者與紀國所坐大屋毘古神
 亦爲同名異神耳非再出也、第十二、須勢理毘賣命、同座、亦御名、若須勢理毘賣
 命、速佐須良比咩命、此神大國主神之御嫡妻也、第十三、稻田宮主須賀之八耳神
 西間傍別座、號於二神曰稻田宮主神也二神者脚摩乳手摩乳神也

●編者云中央座とあるを除くの外東間座西間座東間同座などあるは他の書と合はず
 又事實と違ふ所あるが如しされば強に據るべからず

八坂誌卷二終

八坂誌卷三

社殿沿革の事

天智天皇の即位六年社號を感神院と爲し祭神素盞鳴尊を牛頭天皇
 と稱す朱雀天皇の承平四年六月修行者初めて社壇を建立し後三條
 天皇の延久二年十月十四日焼亡す同三年八月廿五日新造の神殿に
 遷し奉る鳥羽天皇の保安四年七月十八日叡山の僧徒平忠盛源爲義
 等と社内に戦ひ其穢れたるを畏れて神殿を改造し同年十二月廿六
 日遷宮あり近衛天皇の久安四年三月廿九日炎上同年四月改造の神
 殿成り同年六月六日遷宮同天皇の仁平三年四月十五日焼亡後鳥羽
 天皇の文治三年二月廿七日遷宮後土御門天皇の文正元年十二月十
 二日炎上後光明天皇の正保二年正月より翌三年五月に至るまで修
 覆の事ありて同年十一月焼亡同天皇の承應二年十月より翌三年十

一月に至るまで造營の事あり

二十六

(八坂郷鎮座大神記) 齊明天皇即位二年丙辰八月韓國之調遣副使伊利之使主再來之時新羅牛頭山座須佐之雄尊之神御魂齋祭來而皇國祭始依之愛宕郡賜八坂郷並八坂造之姓十二年後天智天皇御宇六年丁卯社號爲感神院宮殿全造營而牛頭山坐之大神乎牛頭天王奉稱祭祀畢

(八坂社舊記集錄) 伊太利之使主が皇大御國に來て山城國愛宕郡八坂郷に其神祠を建てし時至誠感神の字面を擇用ゐて感字に^{カサ}可^サ咎の韓音を充て神字を^{ササ}創^サ咎^サの切音に充て是を感神院と名附けて其神の御正體をば最大牛頭山天王と稱ふるは梵漢並學巧致に協ひて東國通鑑にかの任那なる牛頭てふ人を文工而意盡と稱へたるが如く伊利之使主が意を立て、感神院牛頭天王と號けたるは實に工文盡意の徵號と稱ふべし

(二代要記) 承平四年六月二十六日甲午修行者初建祇園感神院社壇

(扶桑略記廿九) 延久二年十月十四日辛未戌時感神院大廻廊舞殿鐘樓皆悉燒亡

(玉藻) 延久二年十月十四日辛未戌剋感神院拂地燒亡

(扶桑略記廿九) 延久三年八月二十五日丁丑寅刻祇園天神奉遷新造神殿

(百練抄五) 保安四年七月十八日天台衆徒爲先神興欲亂入京中公家遣武士相禦于垣川邊之間棄神興退散又山僧等籠祇園內仍遣越前守忠盛左衛門尉爲義追却之間互合戰神殿內多損命者後日造改神殿奉移御體

(二代要記) 保安四年九月二日祇園神殿造替十二月二十六日遷宮

(本朝世紀) 久安四年三月二十九日丁亥未刻火自三條末河原邊小屋出來燒失數百煙延燒祇園寶殿并三面廻廊舞殿南門

(百練抄七) 久安四年三月二十九日祇園社燒亡

(本朝世紀) 久安四年四月十六日癸卯今日感神院棟上也

(二代要記) 久安四年三月二十九日感神院燒失四月十六日棟上五月二十四日覆勘六月六日遷宮

(百練抄七) 仁平三年四月十五日燒亡其中因幡堂祇園大政所法家千草文倉爲灰燼數萬卷書一時滅云々

(吉部秘訓抄) 文治三年二月二十七日今日祇園社遷宮也

(後法興院記) 文正元年十二月十一日戊申山門訴訟嗽々云々今日可振神興由兼日有其沙汰然而又無其儀十三日庚戌傳聞去夜祇園社頂盡燒了云々不詳其故言語道斷事

二十七

也十九日丙寅此公事濫觴彼豐後所行也抑祇園燒亡事去十二日夜神輿入浴必定之由
自山門相觸間飾御輿奉出廻廊終夜明籌相待處無其儀間社人等各歸宿所人靜後自廻
廊上燒上云々希代之珍事也可恐可慎

(應仁略記上) 當年大亂現行の次第云々祇園炎上の事云々神輿すでに御入らく云々
法師原は祇園の社にどち籠り京極發向あるべきの旨僉議半の處に其夜の夜半ばか
りに祇園の御寶殿より火出で一時に灰燼す

(京都御役所大概覺書五) 一祇園社堂舎 御本社 御拜 東之廂 西之廂 北之廂
北闕伽棚廂 拜殿 中門 南樓門 大塔 右之外小社三十八箇所并神輿三社御供
所石大鳥居瑞籬水屋所々築地塀等御修覆有之云々右祇園并御旅所共社舎正保二年
酉正月より同三年戊五月迄御修覆云々右御造畢之後正保三年戊十一月右御本社拜
殿中門末社二字炎上ニ付承應二年巳十月より同三年午十一月ニ御造營被仰付候

(神祇官達) 感神院祇園社此度八坂神社ト御改被仰出候事

五月

神祇官

八坂誌卷三終

八坂誌卷四

年中神事祭式の事

一月一日白朮祭あり新に鑽出したる火を削掛の木にうつし白朮を
加へて數ヶ所に焼き若水を汲み此火を用て粥を炊き獻る昔は紅葉
の鼓を打ち天長樂を奏して大神樂を行ひ二日三日共に元日と等し
き大神供の神事ありしが今は其事なし 七日若菜祭あり七種の若
菜の粥を獻る昔は八日に牛王杖と稱するものを獻りて祈禱を行ひ
十四日其を處々に配布し又粟の飯を疫神社に獻り日神供と稱する
神饌十三膳を内陣に奉りしが今は其事なし 十五日月次祭あり薄
茶を獻りて請ふ者に其拜服を許す六月の外毎月同じ 十九日疫神
祭あり境内の攝社疫神社の例祭なり疫氣の流行なきを祈る昔は廿
日に社中一同御旅所の冠者殿に参り又本社にて談合の祝儀を行ふ

を是月廿日の定式と爲したりしが孝格天皇の天明年中より其事や
みぬ

二月一日月次祭あり毎月同じ又是月節分祭あり節分の當日本社に
て行ふ

三月三日昔は是日本社及攝社末社共に草餅を獻りて節の神祭を行
ひしが改曆以來其事なし 十四日昔は是日を千文祓と稱し社殿に

翠簾幔幕等を張り又高欄を付け後桃園天皇の安永以來の如きは神
樂役人として片羽屋某出勤し最も盛大なる祭事行はれしが今は絶

へたり 十五日昔は是日を一切經會と定めたりしが夙に改まりて
今は通常の月次祭行はる

四月七日昔は是日より十四日に至るまで社僧等花を摘みて安居會
を行ひたりしが今は絶たり 廿七日大榊八本と中榊四本と小榊二

本と幹三束枝二束とを八瀬より獲て致齋の用に供ふ 三十日三條

京極八坂山白河山五條通御幸町等に榊と齋竹とを樹て、致齋の準
備を爲す

五月一日日本の拜殿華居及境内境外の諸末社等に榊を樹て、致齋
の神事を行ふ此式淳和天皇の天長年中より始まりし舊式なりと傳

ふ 二日昔は是日を致齋神事の祝日と定めたり 三日昔は本社に
蓬と菖蒲とを奉りき 四日昔は末社に蓬と菖蒲とを奉りき 五日

昔は早旦に大粽を本社三座に獻りて節會を行へり 廿日昔は祇園
會始談合の儀式あり 廿三日神輿の掃除日にして公用納と稱し傳

ふ 廿九日夜半四條通の御旅所に齋竹を樹つ 三十日神輿洗の用
に供する布六尺と湯桶と杓とを社務より渡す古例ありき

六月一日昔は是日神輿三基を装束して拜殿に出たせり 十五日官
祭を行ふ奉幣使の参向あり 三十日大祓式あり昔は執行より禁中

に名越の祓具を獻りき

七月十日神輿洗の式あり昔は五月晦日此事ありき 十七日神幸神輿三基を御旅所へ渡し奉る昔は六月七日此事ありき 廿四日還幸神輿三基洛中洛外を巡りて本社に還る昔は六月十四日此事ありき 廿八日神輿洗の式あり昔は六月十八日に行はれき此式兩度共に三基の神輿を加茂川に奉じ到りて水を濯ぎて洗清む 廿九日神事濟の祭典あり昔は是月七日に節の神事行はれしが改曆以來其事なし又十五日に蓮飯の神供を本社末社に獻れる式ありしが後櫻町天皇の明和五年より其事止みぬ 八月昔は是月廿四日に掛頭の神事あり又廿五日に注連掛の式ありしが今は並其事なし 九月昔は是月朔日に大祈禱あり正月三ヶ日の儀に同じ又九日に粟飯を本社に獻りて節の神事を行ひ廿日に談合あり廿三日に新火を鑽出して神供を調進し廿四日に御饗十三膳と高御供十三膳と神酒

三瓶と芋一盛と茄子一盛とを獻りき今は其事なし 十月昔は是月廿日御旅所の官者殿にて誓文拂の式ありしが今は其事なし 十一月一日火焚祭あり昔は此式午日なりき 十二月三十一日大祓の式あり六月に同じ 同夜除夜祭あり昔は是月種々の儀式ありしが今は並其事なし但廿四日の煤掃のみ存れり 例月の月次祭其外年中多くの祭典日ごとく氏子の中なる敬神篤志の人々樂の奉奏あり

(祇園社記) 正月元日 大神供 右行也疫癘祓除之御祈禱也社務執行於拜殿除夜修焉社中不殘出仕 御祈禱并大神樂 右奉爲天下泰平國家長久也社中不殘於神前三日相勸焉 七日 御祈禱 右意趣同元日以爲社之縁日特行御祈禱者也是毎月爲常故下不舉之 十五日 獻粥

(祇園社宮仕方記録) 大晦日夜丑刻大神供御神事日本一州御神事始也大内御記録有之

〔祇園社年中行事〕 花ビラノ四角ニ切ナル押餅ヲ五十枚備ヘ卯刻ニ白粥ヲ獻ズ是ヲ御正稅ト云大神供トモ云花ビラヲ朝拜トモ云

〔感神院記録〕 大神供支度不週々様可用意之由今夜子刻以使者相觸官仕兄部朝乘畢丑刻宮仕等來申案内之間着裝束 純色 參社直參拜殿祝申也 祝表白用事 次第如例其後參西一間部屋富祝事支度物早速可用意之由仰含承知畢寅刻 予 着座其後承仕 一朝圓爲尙二頁一法橋 持參 次 予 登禮盤祝如例則於禮盤賜御富又着本座 東切床一座 次晴春法印於西切床賜富

〔感神院舊記〕 十二月廿八日ヨリ社務承仕官仕潔齋シテ新火ヲ切出シ之ヲ金燈籠ニ移シ置正月元日丑刻大神供儀式ニ彼新火ヲ削掛ノ木ニ移シ白朮ヲ加ヘテ數ヶ所ニ燒キ此式十二月三十日夜削掛神事トナス故ニ太神供神事ハ削掛ノ新火ト若水ヲ以テ粥ヲ焚神前ニ供ス大神樂アリ天長樂ト云神寶ノ小鼓 名紅葉ノ筒 ヲ打御正稅ハ米三升白粥ニシテ宮仕ヨリ承仕ヘ涉ス承仕祝詞ヲ奏テ之ヲ撤ス出勤之社人頂戴ス并神酒洗米後堂ニテ頂戴ス元三日同之

〔感神院舊記〕 同初二日 大神供御祈禱元日ニ同シ神禮記云浴外坂弓矢町愛宕寺ニテ弦指會合シテ大鼓ヲ打酒宴ヲナス此日祇園會ノ弦指上首及祭禮ノ時ノ六人衆ト

稱スルヲ撰定ス俗ニ之ヲ天狗酒モリト云

〔感神院舊記〕 同初三日 大神供元日二日ニ同シ

〔感神院舊記〕 同初七日 七草ノ神事本社并末社ヘ七草ノ粥ヲ奉ル

〔感神院記録〕 同初八日 今曉承仕獻牛王杖并團供數枚於神前團供粉團大如梨盛是於高坏牛王杖十五日味爽用之

〔感神院舊記〕 同十四日 末社注連拂於本社祝儀有之牛王杖所々ヘ配ル社中并地下ハ承仕ヨリ配ル神事記云カユノ式及深更神殿ヲマ、ソ疫ノ神ノ前ニ粟ノ飯ヲ備フ是ヲ三科ノ祓ト云此日十三前ノ日供ヲ内内陣ニ奉リ日神供ト稱ス

〔感神院舊記〕 同廿日 社中御旅所冠者殿ヘ參詣此日於本社廿日談合祝儀アリ天明ノ頃ヨリ中絶ス

〔祇園御鎮座本記〕 元日大神供之事 云々珍珠船曰大神供々餅又以卯杖 并新汲水 煮粥供神前是稱御力二日三日亦然也有大神樂是稱天長地久祈禱神寶小鼓出其鼓筒 黒漆撒金上以金粉畫楓葉故稱楓筒云々神禮記曰天子將軍ノ御祈禱元三ヶ日勤之云云社記曰御正稅ヲ日鹽粥ト云惠美須帥曰元日事ノ始ニ若水ヲ以テ白カユヲ煮テ日ノ神ニ備フ是ヲヒメユト云々卯杖ハ社中而々式禮アリ社務ヘ禮儀ス面々ヘ扇子并

祝盃丸玉

(祇園社記) 二月朔日 御祈禱 右意趣同元日は毎月爲常故下不舉之又無異事之月
關次之耳

(祇園御鎮座本記) 二月初一日 日神供正月十四日ニ同

(祇園社記) 三月三日 節神供

(祇園御鎮座本記) 三月初一日 日神供例月同 初三日 本社并末社各艸餅備フ

十四日 千文被翠簾幔幕ヲ張り神前ノ仕切ヲ取拂ヒ高欄ヲ付神事ナス社務社僧承
仕宮仕勤之安永ノ頃ヨリ社代片羽屋出仕ス片羽屋ハ神樂役人ナリ神事ノ次第卷簾
次神供手操次拜次神酒次菓子次卷敷次拜次奉幣次拍手次御湯次大神樂次祝詞被下
略 十五日 一切經會日次紀事拾芥抄神禮記等ニ見ユ今絶タリ

(祇園御鎮座本記) 四月初一日 日神供例月同 初七日 社記云木殿花供修四月七
日ヨリ十四日迄花ヲ社僧社人ツム也安居ト云日次紀事曰自今日至十四日祇園社供
華云々 廿七日 北山八瀬ヨリ柳ヲ奉祇園トアリ云々神木大八本一丈計也中四本
小二本真二束枝二束ヲ取ニ遺ト云 三十日 致齋ノ神事祝儀アリ宮仕ニテ勤之也
夜九ツ時社務致齋神事札ノ祝詞アリ相終テ宮仕ヨリ所々神木ヲ立ル社記云齋竹柳

京極通三條 八坂山 白川山 五條通御幸町 右四所各齋竹神木以塚建之トアリ

(八坂社舊記集錄) 當社々記延久三年炎燒の事有りて書記多燒亡たれど殘簡もまた
鮮からず其遺文中には八坂社致齋の神事は天長年中より始ると記し云々

(祇園社記) 五月朔日 御祈禱并大神樂 右意趣式同元日 致齋神事 右神事者爲
後六月御靈會先施植賢木於四至境而致清淨之齋也

(祇園御鎮座本記) 五月初一日 御祈禱神酒洗米頂戴元日ニ同シ致齋ノ神事祝儀四
月卅日ニ同シ 神禮記曰祇園ノ柳ヲ今日ヨリ立ル也御旅所ノ柳柱ハ町分ヨリ出ス
札ニ感神院御致齋トアリ神木ハ朔日朝寅刻ニ祇園ヨリ運フト云々 日次紀事云自
今日六月祇園祭禮神事始本社鳥居拜殿其外末々各挿柳 初二日 致齋神事祝儀四
月晦日ニ同シ 初三日 本社三所へ奉蓬菖蒲 初四日 末社々へ奉蓬菖蒲 初五
日 早天ニ大粽一把宛奉本社三所本社於東間社中粽ノ祝儀ト云アリ御神供アリ補
任升ニテ米四斗六升本升ニシテ二斗六升ナリ坊中ヨリ祝詞勤之珍珠船曰神供獻粽
今日男女參詣倍他日云々 廿日 吉符入社務へ雜色ヨリ三度案内アリテ雜色四座
ノ面々社務大書院へ參向承仕宮仕本願片羽屋出勤シテ神事ノ儀ヲシメ合ス祝儀
アリ薄茶アリ菓子粽酒ハ引盃肴ハ木地臺ニ淺瓜ナラヅケ干鰯亦肴青梅ナリ神禮記

云雜色四座ノ面々執行ノ坊へ參會神事ノ儀ヲ談ズ饗應酒宴アリ祇園會ノ例今日ヨリ始ル夫ヨリ四條東洞院辻へ長刀鉾町ノ行軍出迎ス武家ヨリノ仰ヲ言渡ス夫ヨリ山鉾町々へ廻リ申渡ノ式アリ云々日次紀事云祇園會神事定所出山鉾之町拍子習禮始 廿三日 神輿舍掃除ス公用納ト云アリ云々 廿九日 夜半ニ四條御旅所ニ齋竹ヲ建ル云々 三十日 神輿洗神事之事 湯桶杓布六尺自社務渡古例也

〔祇園社記〕 六月朔日 糞束三基之神輿而居于拜殿自今日至七日 七日 御靈會 右者奉遷神靈於神輿而奉成御幸于御離宮云々離宮御在自今日至十四日 十四日 後御靈會 右奉成巡遊神輿乎王城之市而還幸本社 十八日 後神輿洗并下居神供晦日 名越祓

〔祇園御鎮座本記〕 六月初一日 本社拜殿并樓門鳥居所々柳枝結切幣建之柳北山矢脊ヨリ伐來云々 初三日 祇園會鉾小兒乘始 初五日 自今日致齋爲七日 初六日 今日夕方自承仕内陣三社ノ御籬ヲ上ル是ヲ御籬上ゲト云リ 初七日 早天奉神事供 初八日 御旅所ニテ神輿ノ銚綱ヲ紅布六反ヲ以テ基ヲ卷是ヲ御綱ユルメト云 十日 社中御旅所へ參詣ス 十二日 今日神輿ニ上卷シケル紅布六反ヲ取拂フ是ヲ御綱掛ト云 十四日 早天神供調進ス今日自本願神事祭禮ノ案内及三度

而祝儀有之云々 十五日 珍珠船曰臨時祭齋竹神木各取拂ナリ日神供例月朔日同シ 十八日 神輿洗五月晦日同シ 廿日 御劔納ト云御劔三振替サヤニ入神輿御鏡等各唐櫃ニ入寶藏ニ納祝盃アリ 廿一日 一社中出會祝儀有之御納涼ト云神事無難之祝ナリ 三十日 名越ノ祓アリ云々珍珠船曰祇園執行於禁裏獻名越祓

〔祇園社記〕 七月七日 節神供 〔祇園御鎮座本記〕 七月初一日 日神供例月同 十日 美宮預リ承仕宮仕片羽屋八軒以上十軒也十家中ト云此日於執行散物勘定アリ天明二年ヨリ止ム 十五日 神供逆飯ヲ奉本社小社ナリ自此日社僧宮仕已上奉切籠明和五年ヨリ止ム

〔祇園御鎮座本記〕 八月初一日 日神供例月同 廿四日 掛頭神事當番坊ニテ中汲酒ニテ祝盃アリ朝飯出精進入ト云 廿五日 當番坊奉神號床注連ヲ引祝盃アリ注連掛ト云 廿八日 祇園第一之宮神明宮齋竹柳ヲ立ルナリ 〔祇園社記〕 九月朔日 御祈禱并大神樂 右意趣式如元日 大頭神供 右致三十日之齋調進焉 九日 節神供

〔祇園御鎮座本記〕 九月初一日 日神供例月同御祈禱正月三ヶ日同シ 初九日 本社奉粟飯社僧承仕等ナリ社中一統出勤祝儀有之 廿日 廿日談合正月廿日ニ印ス

此日廿三日四日ノ神事ノ式書出ス 廿三日 祀ミ火ト云アリ神供ヲダク火ヲ檜木板ニテ矢竹ヲ以テ火ヲモミ出シ艾ニ付脚ニウツスモミ火ト云 神供調進上段ニ御盤 十三膳 高御供 十三膳 神酒 三瓶 三組宛十三組 芋 一盛 茄子 一盛 廿四日 祝詞奉幣アリ今曉寅刻ナリ社務社僧承任勤之後堂ニテ祝盃有之正月元日ニ同シ昆布切廿二日ニ同シ 廿五日 社僧ヨリ獻神供

〔祇園御鎮座本記〕 十月初一日 日神供例月同 廿日 御旅所官者殿へ群參セリ誓文拂ト云蛭子講トテ諸商家ニ祭日ナレバ官者殿ヲ蛭子命ト世人誤レリ

〔祇園社記〕 十一月午日 御火燒

〔祇園御鎮座本記〕 十一月初一日 日神供例月同 廿四日 八月廿四日ニ同シ精進入ト云アリ天明年中ヨリ止ム 廿五日 當番坊神事入注連掛八月廿五日ニ同シ

〔祇園社記〕 十二月朔日 大頭神供 右式同九月朔日 申日 御煤掃神事并季神樂右用初申或中申

〔祇園御鎮座本記〕 十二月初一日 日神供例月同日次紀事曰神供獻伏免餅籠菓子等同于九月朔日之儀社僧十人之内頭人每年自十一月朔日前齋三十日供物調進トアリ自廿三日之神事ヲ誤レルカ 十三日 米搗ト云アリ竹坊へ宮仕座中出勤祝儀有之

東梅坊同之竹坊東梅坊兩坊へ朝拜米三升五合社用ヨリ出之 十五日 小社公用錢社務へ納之日次紀事云大千度凡參詣先巡拜直南往巷地社而巡之如此一千度其後諸末社祈所願又被疫疾云々 十七日 七人寄合年貢勘定ト云アリ神酒料助之進左内瀬平神樂料平次藤岡分平之進分兩家平次預リ金之丞分左内預リ以上七人ナリ天明年中ノ寫神酒料尤各銀納 千本配米 一升五合四勺五才八毛 廣小路 五斗二升五合一勺 同 七升二合一勺 三條臺 四升四合五勺五才 内 千本配米引殘二升九合九才二毛 天部村 二斗四升一合六勺五毛 七人組 二斗一升三合四勺右合一石九升六合七勺五才五毛也 二十日 本社東ノ間ニテ當番坊ヨリ菓子薄茶酒等出之廿日談合ト云九月廿日ニ同シ天明八年申年ヨリ止ム社地大掃除五月廿三日ニ同シ 廿三日 掛頭神事神供神酒調進モミ火等九月廿三日ニ同シ 廿四日 今曉寅刻神供祝詞社務社僧勤之後堂祝儀并ニ昆布切等各九月ニ同シ 廿五日 注連オロシト云アリ當番坊ニテ朝飯酒出 廿六日 朝拜并ニ鏡餅搗竹坊ニテ宮仕座中出勤祝盃有之 廿七日 東梅坊朝拜鏡餅右竹坊ニ同シ 廿八日 社務承任宮仕座削掛神事前齋別火等安永年ヨリ止ム 廿九日 竹坊東梅坊調進ノ朝拜宮仕座中ヨリ拵へ置ナリ 三十日 早朝當番坊ヨリ案内アリテ承仕宮仕出勤朝拜十三膳各

奉神前ナリ

削掛神事次第 宮仕ヨリ社務へ三度案内ス 先拂 宮仕手松明 若水桶 宮仕手
松明 卯杖 宮仕 金燈籠幣承仕職社務社僧 貞享年中ヨリ略之其後宮仕ヨリ社
務へ三度案内シテ竹松明ニテ本社ニイタル社務職ヲ相待手松明ニテ小社ヲ案内シ
神樂所ノ後ヲ中門ヨリ拜殿へ昇リ奉祝詞宮仕若水桶ヲ持拜殿ヲ巡リ近江近江丹波
丹波ト呼ビ三度巡リテ又神殿ニ昇リ削掛ノ木ニ火ヲ付授ヤレバ近江近江丹波丹波
ト呼ビ此煙ノ當ル方疫氣アリト云傳テ我國ノ方ヲサケテ餘國へ煙ヲ送ルノ儀ナリ
珍珠船曰今夜子刻祇園社灯燭之外悉滅火暗中參詣人恣口而片言他人瑕疵假令雖聞
其聲知其人不爭之不惧之是懺悔義而勸善懲惡之微意乎房州千蒙笑而亦此類也云々

八坂誌卷四終

八坂誌卷五

歷朝崇敬の事

淳和天皇の天長六年四月十六日山城國愛宕郡八坂郷の岳一箇所を
感神院の祠官右衛門督紀朝臣百繼等に給ひ祭禮の神地としたまふ
清和天皇の貞觀十八年疫病天下に流行し官幣を奉りて祈らせらる
忽其驗あるに感じて勅願の社としたまふ陽成天皇の元慶元年疾疫
瘰癧天下に起り貴賤尊卑其方術に迷ひ勅使を遣して官幣を奉り神
威に感じて社殿數字を立てらる同三年叡感の餘堀河の地十二町を
寄附して神領の地と爲し又材木商の人三百六十人を神人に補せら
る朱雀天皇の天慶五年六月廿一日東西賊亂鎮遏の報賽として東遊
と走馬十列とを奉らる圓融天皇の天祿三年六月十五日走馬勅樂東
遊幣帛等を奉らる同天皇の天延二年六月十四日始めて御靈會を行

はせらる其濫觴は貞觀十一年なりしと傳ふ翌三年六月十五日去年の飽瘡の事に依り走馬勅樂東遊等を奉らる行事は參議源惟正勅使は右近少將藤原理兼左右御馬各五匹左右近衛の官人已下供奉す東遊の歌あり

神かせの八坂の里と今日より君が千年はかろへはむる一條天皇の長徳二年二月廿五日臨時の官幣を奉り廣田の次北野の上列せらる三條天皇の長和五年二月十七日四至の社領を附せらる後一條天皇の寛仁二年六月十五日金幣銀幣神馬十列等を奉らる後三條天皇の延久二年二月十日宣旨を以て東は白河山を限り南は五條以北を限り西は堤を限り北は三條以南を限り四至の境界を定めらる白河天皇の應徳三年毎日十三前の神供料米を備へ追旬下し行はる堀河天皇の承徳元年二月三日封戸五十畑を奉らる同二年末代退轉なき爲其長日用途の料として四箇保の地を附せらる鳥羽天

皇の天仁二年四月仙院より金字の仁王經一部を納めらる同天皇の永久五年六月十四日院宣に依り公卿已下馬長を騎進す崇徳天皇の天治元年六月十五日貞觀天延等の例に因り臨時祭を行ひ勅使右少將公隆を遣して幣帛走馬東遊神樂等を奉らる其式最も嚴重なり宣命の規定あり

天皇我詔旨度掛畏岐祇園天神乃廣前爾恐美恐美毛申賜者久止申去大治元年與利始氏限永代氏毎年乃今日恒例乃會日爾東遊走馬并神樂等乎調備氏官位姓名乎差使氏禮代乃御幣乎令捧持氏奉出給古度乎天神此狀乎平久安久聞食氏天皇朝廷乎寶位無動久常磐堅磐爾夜守日守爾護幸賜比氏國家安穩爾天下快樂爾護恤給倍度恐美恐美毛申賜波久止申

近衛天皇の久安三年六月十五日幣帛を奉らる是日鬪亂あり同年七月廿七日鬪亂の不敬を謝罪せむ爲奉幣使を立てらる宣命あり

天皇我詔旨止掛畏支祇園天神乃廣前爾恐美恐美毛申賜波久止申
 今年六月十五日乃夜中務大輔平朝臣清盛爲果私宿願爾田樂乎調
 立天令參詣社頭之間爾不慮之外爾鬪諍出來禮利此由乎聞食驚天
 清盛加下手七人袁召取畢天其後尋搜彼此袁實否天欲行罪科之間
 爾同廿八日爾延曆寺衆徒等下降西坂本邊天上奏狀爾久清盛加所
 從等之中鬪亂忽起天感神院所司并神民等被刃傷之上爾舞裝束袁
 穢損之社壇邊爾亂入之由袁訴申之時爾仰云事乃理非袁決天可致
 沙汰者但日吉社并當社乃神興袁奉昇出古止非常之計不能禁遏奈
 利雖出惡僧之造意與利猶動眇身之衷襟仍同卅日爾遣官使等天實
 檢社家之處爾申旨或有實正之事利或有不審之事利神慮難測志氏
 愚心難決志然間今月五日爾仰檢非違使等天清盛加所遣乃犯人袁
 令拷問之處爾各申天云依爲田樂之後卷天祇候鳥居邊須留爾社內
 與利鬪諍出來世利不知事根元志天放箭之間刃傷乃事不意爾有遣

利清盛帶弓箭天向社頭事袁波深以各所爭申奈利以是等之趣天下
 法家天清盛所當罪狀袁令勘申之處可徵贖銅卅斤之由隨彼勘狀天
 所仰下奈利抑賞罰二柄波一人乃所掌奈利緩急之間雖存朝憲止毛
 冥鑑難知之天叡念持疑須留古止日夕爾恐歎天大坐古止無限之此
 狀袁令謝申止所念行天奈卒故是以吉日良辰乎擇定天從四位上右
 近衛少將源朝臣成雅差使天禮代乃御幣乎令捧持天奉出給布天神
 此狀袁平久安久聞食天無爲無事爾令有給天天皇朝廷乎寶位無動
 久常磐堅磐爾夜守日守爾護幸爾奉給天玉體安穩爾黔首泰平爾風
 雨順時比稼穡豐稔爾世爾拋兵戈之用天人民無疾疫之愁良卒止護
 恤給止恐美恐美毛申賜波久止申
 同四年四月十日幣帛を奉らる同六年六月十五日臨時祭を行ひ幣帛
 を奉らる後白河天皇の保元二年六月一日勅して洛中の富家に求め
 御靈會の鉾を社家に賜はり又馬上の役を定めらる同月十四日始め

て御靈會の馬長を定めらる二條天皇の應保二年八月廿四日境内の
 蔀屋の顛倒したる恐を謝せむ爲臨幸して神樂を行はる六條天皇の
 仁安二年六月十五日臨時祭を行はる高倉天皇の嘉應元年六月十五
 日内藏寮舞人等の装束を調進し臨時祭を行はる同天皇の承安二年
 六月四日神輿三基と獅子七頭とを進らる安徳天皇の養和元年五月
 二日御劍一腰と唐錦一帖と御幣紙二帖と白布一段とを奉らる同天
 皇の壽永元年六月十五日臨時祭を行はる同二年六月十五日臨時祭
 を行はる御禊あり新中納言宣命を奏す陪膳頭中將隆房役送藏人少
 輔親經使民部大輔兼定なりき後鳥羽天皇の文治二年六月十四日親
 經禁中の事を執り明日臨時祭を行はる又是日六月會の料所として
 越中國堀江庄同國梅澤小泉滑川三箇村等の地を附せらる同三年六
 月十五日臨時祭を行はる神馬十列常の如し陪膳彈正大弼資泰奉行
 仲盛使散位藤基清なりき同天皇の建久二年六月十五日臨時祭を行

はる陪膳光重奉行仲盛使有賴陰陽師晴光等なりき同五年正月八日
 勅願の祈禱あり土御門天皇の建永元年四月十九日院北面の衆を下
 して田樂を行はる順徳天皇の建保六年三月廿九日競馬七番を行は
 る同年八月廿日寶殿青耀の事に依り軒廊の御卜を行ひ翌廿一日幣
 帛を奉らる同天皇の承久元年四月卿相以下新造の神輿を調進す同
 二年二月廿一日奉幣使を立てらる後堀河天皇の寛喜三年七月十二
 日御靈會あり本社の穢昨日三十日に満ち殿上人馬長の事殊に沙汰
 ありて三十騎に及べり四條天皇の暦仁元年六月十五日臨時祭を行
 はる使兵部權大輔季盛なりき後嵯峨天皇の寛元四年六月廿九日御
 靈會を行ひ翌日公家より使を立て又院より十列を發遣せらる後深
 草天皇の寶治元年十月五日萬里小路大納言公基以下參入して社殿
 木作の日時を定めらる龜山天皇の正元二年二月六日奉幣使を立て
 らる同天皇の文永元年五月十五日奉幣使を立てらる同四年六月十

五日臨時祭を行はる藏人皇后宮權大進奉行使治部權少輔兼俊宣命
 上卿大炊御門中納言なりき同六年三月廿八日奉幣使を立てらる後
 醍醐天皇の元亨元年六月廿五日流行病の除却を祈り宸筆の心經廿
 卷と模寫の心經一萬卷とを納めらる同天皇の嘉曆元年九月廿七日
 坊城中納言定資を奉行として尾張國栗野氷室の地を勅願料所と定
 めらる同天皇の延元元年七月六日祈禱を行はる後村上天皇の興國
 六年閏二月廿一日幣帛を奉らる宣命あり

天皇我詔旨止掛畏幾祇園天神乃廣前爾恐美恐美毛申給波久止申
 久尊神者垂靈跡於洛東禮天振冥威於海内此給布列代乃明王毛皆
 所欽仰奈利况朕眇身爾氏久爲元首利非從神之加護者爭致國之應
 熙矣然乎者元德二年閏六月廿九日乃夜中不慮之外爾鬪諍出來氏
 神民被殺害禮天社壇衰令汚穢牟留由乎社家注進之間同年八月爾
 造營假殿之氏奉遷神體計利其後造替擁怠之氏時代相隔禮利冥慮

毛叵測之衷襟不聊須仍去年七月二日因准延久以來之例天雖遂正
 殿遷宮之儀止毛成風之功多年遲引世留若付件事天可有咎崇久止
 毛解謝乃道者神明所宥奈利止所念行天奈牟故是以吉日良辰袁擇
 定天官位姓名袁差使氏禮代乃大幣袁令捧持天奉出給布掛畏天神
 此狀袁平久聞食天無事故久納受給天攘妖孽於萬里此啓聖運於千
 歲天乾坤爾合其德世與日月爾比其明氏天皇朝廷乎寶位無動久常
 磐堅磐爾夜守日守爾護幸奉給天華夷有截爾草民和平爾之氏永戢
 干戈之用免又無疾疫之患良牟止護恤給倍止恐美恐美毛申賜波久
 度申

後龜山天皇の文中三年五月三日造營の事を達せらる後花園天皇の
 寶德二年六月十五日臨時祭を行はる使法性寺侍從藤原雅保奉行藏
 人右兵衛權佐經茂なりき御朱印は後西院天皇の寛文五年七月十一
 日社領を一百四十石と定めらる明治四年五月十四日官幣中社に列

せられ爾後祈年新嘗例祭の三大官祭には奉幣使參向祭典舉行を恒例と定めらる

(本朝編年錄十) 天長六年夏四月庚戌朔乙丑山城國愛宕郡岳一處給右衛門督紀朝臣百繼等爲祭禮神地

(日本逸史) 山城國愛宕郡丘一處給右衛門督紀朝臣百繼等爲祭禮神地

(建内氏本系帳) 紀朝臣百繼 右衛門督 母八坂造女 弘仁十二年正月叙正四位下

任越前守 天長六年四月於山城國愛宕郡八坂郷丘園一處給右衛門督百繼等爲祭禮神地

地感神院是也

(本朝通鑑廿五) 天長六年四月山城國愛宕郡八坂郷丘一處給右衛門督紀朝臣百繼等爲祭禮神地也

●編者云天長六年は五十三代淳和天皇の即位六年己酉にして五十六代清和天皇の貞觀元年己卯よりは三十一年前なり本朝編年錄に夏四月庚戌乙丑とあるは四月十六日なり

(八坂郷鎮座大神記) 淳和天皇御宇天長六年右衛門督紀朝臣百繼爾感神院祠官並八坂造之業賜爲受續 (參考)

(祇園社記) 十八年天下疫京師最已甚貴賤羣卑迷方術朝廷爲之問其爲於卜筮占曰可禱當異之社而利也從被禱伊勢稻荷之社然無驗使別尋社東山麓有一小社而當異稱牛頭天王奏乃奉官幣被禱爾果有驗叙慮以感神威改造社壇於今之地自是以降作勅願之社也

●編者云十八年は貞觀十八年なり

(法眼晴顯記) 陽成院御宇當社始而被成勅願之社溢傷者元慶元年疫疾瘧瘡起于天下貴賤羣卑迷于方術神祇官陰陽寮卜定之所指依爲辰巳角神之御祟雖被發遣勅使伊勢大神宮無其驗之間重雖被進稻荷社以無其驗之間以勅使被尋訊辰巳角方之神明之處祇園社御坐之由依經奏聞被發遣勅使之處於當社被奉獻官幣於賢前自斯時疫疾忽除却瘧瘧厲無爲之間感天神之威驗壞運昭宣公臺樹立數字精舍

(中臣祓卜部抄) 貞觀十八年今歲疫神作祟以外也曩祖日良麻呂京中ノ男女ヲ引井テ

六月七日十四日疫神ヲ神泉苑へ送ル其次ノ年又疫神祟ル程ニ百姓送神與神泉苑ニ

ヨリ爾來年々六月七日ニ如此シツケテ是ヲ祇園會ト云也 (參考)

(法眼晴顯記) 同三年叙感之餘被寄附堀河十二町之以流爲神領敷地以材木商人等被補神人 左右方三百六十人 是最初神領根本神人也

●編者云十八年は貞觀十八年なり

(法眼晴顯記) 陽成院御宇當社始而被成勅願之社溢傷者元慶元年疫疾瘧瘡起于天下貴賤羣卑迷于方術神祇官陰陽寮卜定之所指依爲辰巳角神之御祟雖被發遣勅使伊勢大神宮無其驗之間重雖被進稻荷社以無其驗之間以勅使被尋訊辰巳角方之神明之處祇園社御坐之由依經奏聞被發遣勅使之處於當社被奉獻官幣於賢前自斯時疫疾忽除却瘧瘧厲無爲之間感天神之威驗壞運昭宣公臺樹立數字精舍

(中臣祓卜部抄) 貞觀十八年今歲疫神作祟以外也曩祖日良麻呂京中ノ男女ヲ引井テ

六月七日十四日疫神ヲ神泉苑へ送ル其次ノ年又疫神祟ル程ニ百姓送神與神泉苑ニ

ヨリ爾來年々六月七日ニ如此シツケテ是ヲ祇園會ト云也 (參考)

(法眼晴顯記) 同三年叙感之餘被寄附堀河十二町之以流爲神領敷地以材木商人等被補神人 左右方三百六十人 是最初神領根本神人也

●編者云十八年は貞觀十八年なり

(法眼晴顯記) 陽成院御宇當社始而被成勅願之社溢傷者元慶元年疫疾瘧瘡起于天下貴賤羣卑迷于方術神祇官陰陽寮卜定之所指依爲辰巳角神之御祟雖被發遣勅使伊勢大神宮無其驗之間重雖被進稻荷社以無其驗之間以勅使被尋訊辰巳角方之神明之處祇園社御坐之由依經奏聞被發遣勅使之處於當社被奉獻官幣於賢前自斯時疫疾忽除却瘧瘧厲無爲之間感天神之威驗壞運昭宣公臺樹立數字精舍

(中臣祓卜部抄) 貞觀十八年今歲疫神作祟以外也曩祖日良麻呂京中ノ男女ヲ引井テ

六月七日十四日疫神ヲ神泉苑へ送ル其次ノ年又疫神祟ル程ニ百姓送神與神泉苑ニ

ヨリ爾來年々六月七日ニ如此シツケテ是ヲ祇園會ト云也 (參考)

(法眼晴顯記) 同三年叙感之餘被寄附堀河十二町之以流爲神領敷地以材木商人等被補神人 左右方三百六十人 是最初神領根本神人也

(日本紀略二) 天慶五年六月廿一日癸酉奉東遊走馬十列於祇園社依東西賊亂御賽也
(二十二社注式) 祇園社 臨時祭 第六十四代圓融院元祿三年六月十五日始奉走馬
勅樂東遊御幣等使云々此後中絶第七十五代崇徳院天治以後每年相續

(法眼晴顯記) 圓融院天延二年六月十四日被始行御靈會

(諸國圖會年中行事大成四) 六月 七日祇園會 祇園會の起は貞觀十八年疫神祟る
日良麻呂京中の男女を率て六月七日十四日疫神を神泉苑に送る其次年又疫神祟る
程に百姓神興を神泉苑に送る爾來年々六月七日如此しつけて是を祇園會といふ(參考)

(年中行事秘抄) 六月 十五日走馬勅樂等事 天延三年六月十五日公家自今年於感
神院被奉走馬勅樂東遊依去年飽瘡事也依上卿不參參議源惟正卿參入行事右近少將
藤原理兼爲使左右御馬各五疋左右近官人已下供奉東遊歌云

神カセノ八坂ノ里ト今日ユリツ君ガチト世ハ計始ル

(公事根源) 六月 祇園臨時祭 十五日 御禊などの儀大かたは平野にかなじつか
ひ殿上五位東遊を奉らる宣命有天治元年六月よりはしまる又けふ走馬勅樂などあ
り天延三年の東遊の歌にいはいはく
神かせの八坂のさと今日よりぞ君が千年はかぞへはじむる

八坂の里とはいまの祇園なり山城國愛宕郡八坂郷といふ所に神社を作られたる故
なり

(日吉山王二十一社新記) 長徳二年二月廿五日被奉獻臨時之官幣之日加祇園社爲廿
一社祇園之事可爲廣田次北野之上由宣下 日本國中三十餘座預年中四度官幣并臨
時祭禮者也其中於廿二社以勅使被奉獻幣帛者也矣

私云已上舊記吉田家説也

(法眼晴顯記) 後一條天皇御宇長和五年二月十七日當社領四至被附

●編者云後一條天皇とあるは三條天皇とすべき誤なり

(小右記) 寛仁二年六月十五日丙寅今日祇園御會仍奉幣子女同奉幣宰相參大殿縁扈
從參給祇園之御共左中辨來云可騎之馬極凡者借與厩馬了宰相申刻許歸來云大殿只
今歸給此間雨脚不止被奉金銀幣例幣神馬并十列至神馬被長奉又有御諷誦給院家司
等祿法印院源祇候院儲養撰政引率上官等被參候大殿御供之卿相左大將教通左衛
門督頼宗中宮權大夫經房權中納言能信右衛門督實成伊豫守兼隆左大辨道方修理大
夫通任右大辨朝經資平云々

(法眼晴顯記) 後三條院延久二年二月十日四至太政官符被宣旨四至 東限白河山南

限五條以北西限堤北限三條末以南

〔法眼晴顯記〕 白河院應德三年被因准賀茂社佳例被備進日別十三前神供料米追旬被下行

〔中右記〕 承德元年二月三日按察大納言殿令參仗座云々此次封戸五十烟奉寄威神院之由被仰下是依公家御願也四月廿六日午時許參内今日有行幸威神院云々去年九月比玉體不豫之時被立御願可有行幸祇園并被奉封戸五十烟可立多寶一基者云々封戸五十烟前日被寄奉已了

〔法眼晴顯記〕 後堀河院承德二年爲無末代退轉爲其長日用途料所被寄附四箇保

〔祇園社本縁録〕 天仁二己丑年四月仙院ヨリ金字仁王經一部奉納セラル

〔百練抄五〕 永久五年六月十四日御靈會依院宣公卿已下騎進馬長

〔永昌記〕 保安五年六月十五日庚申今日公家御奉幣侍從中納言於仗座行之云々去年御宿願内云々使右少將公隆近衛官人十人奉仕舞人陪從四人宣命云有所思食限永代自今日禮代幣帛走馬東遊神樂等調備給者天延三年貞觀年中有此例云々可有臨時祭之由世以云然而今日議如此了先於藏人所給裝束 他社從使家給之 右近陣着饗内藏儲之 饗了舞人參弓場殿次渡南殿使在後出日華門次出左衛門陣舞人陪從駕寮

御馬 諸社例也 御琴内藏幣先行如他社參威神院南門行道之間參會於舞殿舞之使立樓門雖敷座稱障不着有御神樂事人長兼近事了歸路本自近衛輩參入勤仕東遊云々今度被止之人長着位袍束帶云々如何

●編者云保安五年とあるは天治元年の誤なり

〔百練抄六〕 天治元年六月初有祇園臨時祭

〔師遠年中行事〕 六月 十五日威神院臨時祭 使殿上五位天治元年初有此度舞人近衛府生番長

〔師光年中行事〕 六月 十五日祇園臨時祭 使殿上人五位又被調進東遊音樂等有

宣命

〔年中行事抄〕 六月 十五日祇園臨時祭 以殿上五位帶劔人爲使文官又有例

〔吹塵録卅五〕 御貢獻米并定例御下行 祇園臨時祭 一米凡三百九十一石六斗五升

銀三百一匁

〔年中行事抄〕 六月 十五日祇園臨時祭 天治元年始被立臨時祭使 殿上五位

中納言實隆卿參陣有宣命又東遊音樂被調獻其後爲年事

〔籙中抄上〕 六月十五日ぎをんのりむじの祭

(年中行事秘抄) 六月 十五日祇園臨時祭事

(祭秘御抄中) 一神事次第 祇園臨時祭 云々已上小祀當日神事也皆有御湯殿有御

禊

(年中行事秘抄) 六月 十五日祇園臨時祭事 被立臨時祭使 殿上五位 天治元年

始之如平野祭又東遊音樂被調獻有宣命

(夕拜備急至要抄上) 一十五日祇園臨時祭 此儀同平野 使 五位 御禊 陪從役

送御贖物

(拾芥抄下) 祇園 五位一人勅使感神院三前八王子八前

(公事根源) 六月 祇園臨時祭 十五日 御禊などの儀大かたは平野におなじつか

以殿上五位東遊を奉らる宣命有天治元年六月より始まる又けふ走馬勅樂などあり

(江家次第六) 平野祭上申日延喜格云延曆年中立件社太政官式云凡平野祭者桓武天

皇之後王 改姓爲臣者亦同 及大江和等氏人并預見參華山院寛和元年四月十日甲

申始有平野臨時祭使左衛門權佐藤原惟成勅之 (参考)

(往史抄上) 六月 十五日祇園臨時祭 其儀同平野祭也 宣命 用筥無内覽草案等

天皇 我詔旨 度掛畏 祇園天神 乃廣前 爾恐 美恐 美毛 申賜者久 申久 去大治元年 興

利始 氏 限永代 氏 每年 乃 今日恒例 乃會日 爾 東遊走馬并神樂等 乎 調備 氏 官位姓名 乎

差使 氏 禮代 乃 御幣 乎 令捧持 氏 奉出給 乎 古度 天神此狀 乎 平久安 久聞食 氏 天皇朝廷 乎

寶位無動 久常警堅誓 爾 夜守日守 爾 護幸賜 比氏 國家安穩 爾 天下快樂 爾 護恤給 倍度

恐 美恐 美毛 申賜 止 波久 申

(執政所抄下) 六月 十五日祇園御幣神馬事 使五位 御幣一棒志氏紙十六枚納殿

紙一丈裏布一丈串一支修理所裏薦二尺御庄所已上於山納任例調備之

乘尻摺袴布四段同櫛舍人袴布一段仕丁禪布一段膝突麻布一段已上年預所沙汰

神馬御廐如例乘尻小使陪膳藏人所同之陰陽師小使下家司政所同之御禊具出納同之

大治元年各一捧在之 脇御幣北政所三捧以御封勤仕之歟姬御前三捧納殿沙汰歟已上仕丁政所催之

同天神供三夜事能米十五石油一斗一升七合已上成下文自納所成所付之

上品紙卅帖淨衣一領白絹四丈承仕淨衣布一段氈敷布一段名香沈丁子白檀薰陸龍腦

已上納殿蘇蜜已上贊殿折敷卅九枚長櫛二合杓柳各二柄已上檜物御庄兼日申成御下

次下知之又庄家故而造儲之歟五穀四斗五升 各九升 稻大豆小豆大麥小麥已上政

所出納備進之

件事兼日以例文殊致清淨沙汰奉行下家司皆催調十二日書送文申少輔殿御文遣橋下
權別當桓勝房益請文遣覽之但御鏡三面奉御之時鑄物師工人召御倉町各其身禊齋占
東三條殿北馬場掃除敷砂引廻注連尋召清淨銅鑄之令孫瑩之淨衣布五段給之饗出納
等勤之

御鏡奉御時家司下家司一人爲御使祝師在祿

(法眼晴顯記) 鳥羽院勅願歟保延二年被寄附冷泉東洞院方四町於旅所之敷地 號少

將井婆利女御旅所 當社一圓神領也

(舊記) 久安三年六月十五日丁未依祇園御會奉幣

(本朝世紀) 久安三年七月二十七日己丑今日祇園一社被立奉幣使入夜權中納言藤重
通卿參仗座召大內記藤長光令草宣命了是被謝去六月十五日鬪亂事也次被行軒廊御

卜

天皇 我詔旨 止掛畏 支祇園天神 乃廣前 爾恐 美恐 美毛 申賜 止 久 申今年六月十五日乃

夜中務大輔平朝臣清盛爲果私宿願 爾田樂 乎 調立 天 令參詣社頭之間 爾不慮之外 爾

鬪靜出來 禮利 此由 乎 聞食驚 天 清盛加下手七人 召取畢 天 其後尋搜彼此 加實否 天

欲行罪科之間 爾同廿八日 爾延曆寺衆徒等下降西坂本邊 天 上奏狀 爾久 清盛加所從

等之中鬪亂忽起 天 感神院所司并神民等被刃傷之上 爾舞裝束 衰穢損之 社壇邊 爾亂

入之由 衰 訴申之時 爾仰云事 乃理非 衰 決 天 可致沙汰者但日吉社并當社 乃神興 衰 奉

昇出 古止 非常之計不能禁遏 奈利 雖出惡僧之造意 與利 猶動砂身之衷襟仍同卅日 爾

遣官使等 天 實檢社家之處 爾申旨或有實正之事 利 或有不審之事 利 神慮難測 志 氏 愚

心難決 志 然問今月五日 爾仰檢非違使等 天 清盛加所遣 乃犯人 衰 令拷問之處 爾各申

天云依爲出樂之後卷 天 祇候鳥居邊 爾須留 社內 與利 鬪靜出來 世利 不知事根元 志 天 放

箭之間刃傷 乃事不意 爾有 遣利 清盛帶弓箭 天 向社頭事 衰 波 深以各所爭申 奈利 以是

等之趣 天 下法家 天 清盛所當罪狀 表 令勘申之處可徵贖銅卅斤之由隨被勘狀 天 所仰

下 奈利 抑賞罰二柄 波 一人 乃所掌 奈利 緩急之間雖存朝憲 止 毛 冥鑑難知 之 天 寂念持

疑 須留 日夕 爾恐 歎 天 大坐 古止 無限 之 此狀 衰 令謝申 止 所念行 奈 故是以吉日良辰

手 擇定 天 從四位上右近衛少將源朝臣成雅差使 天 禮代 乃御幣 乎 令捧持 天 奉出給 布

天神此狀 衰 乎 久 安 久 聞食 天 無爲無事 爾 令有給 天 天皇朝廷 乎 寶位無動 久 常誓堅誓

爾夜守日守 爾護幸 閉奉給 天 玉體安穩 爾 黔首泰平 爾 風雨順時 比 稼穡豐稔 爾 世 爾 拋

兵戈之用 天 人民無疾疫之愁 止 護恤給 止 恐 美 恐 美 毛 申賜 止 波 久 申

(本朝世紀) 久安四年四月十日丁酉今日祇園一社被奉幣帛

(臺記) 久安六年六月十五日庚申是日依例奉幣祇園依此事昨日二位遷他所食鹿之故也

(臺記) 久安六年六月十五日庚申傳聞祇園臨時祭之間少將實長朝臣與藏人源賴行云云

(法限晴顯記) 保元二年丁丑六月一日爲添御靈會祭禮增天神之威儀劔鎌鉞張被下社家勅云爲儼明神之祭禮宜被下鉞早尋搜洛中富家可差定馬上役云々

(百練抄七) 保元二年六月十四日祇園御靈會今年始有馬長如日吉

(百練抄七) 應保二年八月廿四日稻荷祇園行幸也祇園部屋傾倒仍於殿上有議遂臨幸爲謝其恐被行御神樂當社御神樂今度始之

(愚味記) 仁安二年六月十五日辛巳申刻許參內今日祇園臨時祭也

(兵範記) 嘉應元年六月十五日庚子參內祇園臨時祭有御禊內藏寮調進舞人等裝束行事藏人右衛門尉親光出納尙親等檢知於藏人所分賜之即着用歸參於右近陣差饗饌如例

(百練抄八) 承安二年六月十四日祇園御靈會上皇有御見物殊被刷之神與三基師子七頭去四日自院被調進之

(吉記) 治承五年五月二日丁丑傳聞自院被奉獻銀劔唐錦等於諸社以廳官爲御使云々祇園云々已上社別御劔一腰唐錦一帖御幣紙二帖白布一段

●編者云治承五年とあるは養和元年の誤なり

(玉海) 養和二年六月十五日甲寅此日依祇園臨時祭神齋年來殊不神齋依障不奉幣也

●編者云養和二年は壽永元年壬寅なり

(吉記) 壽永二年六月十五日戊申乘燭之後參大內先雖伺陣座無人之間候殿上方頌之先被立祇園臨時祭使新中納言賴被奏宣命主上出御有御諫陪膳頭中將隆房朝臣役送藏人少輔親經使民部大輔兼定云々

(玉海) 文治二年六月十四日庚申明日祇園臨時祭上卿已上事云々禁中事親經申沙汰云々

(法限晴顯記) 文治二年六月十五日被始行六月會料所越中國堀江庄同國梅澤小泉滑川三箇村

(玉海) 文治三年六月十五日乙酉此日祇園臨時祭也云々又立祇園神馬十列如常但今度當社初度也幣只一串也陪膳彈正大弼資泰朝臣奉行仲盛使散位藤基清非職也藏人五位陰陽師天文博士廣基如他社例使必可參社頭之由以行事仰之兩三町騎馬相

從其後以車參社頭云々

(玉海) 建久二年六月十五日壬辰此日祇園臨時祭也上卿源中納言依御物忌陪膳宗賴朝臣役供光綱等伺候使侍從能資云々未刻餘退出爲發遣神馬十列也申刻小浴着束帶依雨中門儲座陪膳光重朝臣奉行仲盛使有賴陰陽師晴光等也

(法眼晴顯記) 後鳥羽院勅願建久五年甲寅正月八日奉爲公家御祈禱被備進天神供

(世世樞覽) 建永元年四月十九日院下北面衆於感神院田樂

(世世樞覽) 建保六年三月廿九日於祇園社七番競馬

(百練抄十二) 建保六年九月廿日被行軒廊御下是依祇園寶殿青耀事

(祇園社本緣錄) 建保六年九月廿一日北野祇園へ奉幣アリ又院宣ニヨリ明年四月ニ

卿相以下祇園へ新造ノ神輿調進アリ

(祇園社本緣錄) 承久二年二月廿一日奉幣使慧星御祈也

(百練抄十三) 寛喜三年七月十二日祇園御靈會也本社穢昨日滿卅日了所々殿上人馬

長事殊有沙汰及卅騎云々

(百練抄十四) 曆仁元年六月十五日戊午祇園臨時祭使兵部權大輔季盛依無御湯殿不

被行御禊也

寄町なし

●編者云明治二十九年七月十一日發行の八坂神社祭禮行列案内記には見ぬす

(月鉾町祇園會の記録) 蟠蟠山 西洞院四條上町

緣起 車の廂の上に蟠蟠ありて臂を動かし羽をつかふ云々

寄町 合三町

編者云明治二十九年七月十一日發行の八坂神社祭禮行列案内には見ぬす

(月鉾町祇園會之記録) 蘆刈山 綾小路西洞院西入釜屋町

増補緣起 大和物語云津の國なにはのわたりに家して住む人ありあひしりて年頃わたらひなともいとわろくなりて家もこぼれつかふ人なともとくある所いきつゝたゞ住みわたるほどにさすがげすにもあらねば人にやどはれつかはれもせずいとわびしかりけるまゝにかもひわびてふたりいひけるやうなはわびしうては得あらじ男はかくはかなくてのみいますかぬめるを見捨てはいづちもくぬいくまじ女も男もすてゝはいづちかゆかんののみいひわたりけるを男おのれはとてもかくてもへなん女のわかきはどにかくてあるなんいとくをしき京にのぼりてみやづかへをもせよよろしきやうにもならばわれをもとぶらへおのれも人のこともならばかな

らすたづねとぶらはんなどなくくいひ契りてたよりの人に云つぎて女は京にい
たりあるやんことなき所にみやづかへしけるに此所の北方うせたまひしかば此女
をかもひたまひて妻になりけるかゝりて難波にゆきしにあしになひ男來りしを
みるにもとのをどこなりしかば呼よせけるに男も妻と知てよめる

きみなくてあしかりけりと思ふにも

いといなにはのうらぞすみうき

女是を見てきたりける衣ぬぎて男にあたへて歸りけりとなり蘆刈といふ語も此物
語にもとづきて作れり其蘆刈の語のさまをうつせしものなり

人形尉殿 人形長凡五尺右手に鎌左手に蘆を持衣裳紺地錦の着付寄水衣腰帶半切

寄町 合十町

〔月鉾町祇園會之記録〕 孟宗山 烏丸通四條上町

縁起むかし吳の國に孟宗字は恭武といふ人母をやしなひて至孝なり母筭をのぞみ
けるとき冬の節の事にて筭なかりしかば孟宗竹林に至り泣きかなしみけるに雪中
に筭生じたり悦び掘取りて母にすゝめけるとぞまことに孝行の感ずる所いちじる
しき事也其後吳の孫皓に仕へて司空の官に至る云々

人形 孟宗新作也衣裳唐裝束みのかさを着て左の手に鎌を持右の手に筭を持山の
全體雪中のけしき也

寄町 合七町

〔月鉾町祇園會之記録〕 保昌山 東洞院高辻下燈籠町

縁起 平井の保昌禁庭の花を偷取り官女つかはす體をうつすむかし保昌官女を戀
文かくりしに官女難養をいひかけて保昌が心を引きみむとひそかに南殿の花を折
り送りたまはゞ心にしたがあはむといひつかはせしかば保昌則夜中に禁庭に忍入り
花を取りて送りしと也

人形 平井保昌也六尺二寸計金梨地の臺に乗り紅梅の花を持大將鎧を着し太刀刀
比首の三品あり腰あてをつくる

寄町 合八町

〔月鉾町祇園會之記録〕 傘鉾 四條通西洞院西入町

古例 四條高倉雜色前寺町四條辻同大雲院門前佛光寺油小路東入町油小路四條下
町の町内にて二ヶ所右の所々にて椿振の藝あり寺町四條下安前町にて酒迎西洞院
五條坊門町にて酒迎と團子を出す油小路四條下石井筒町にて篠に扇子を附て出す

〔月鉾町祇園會之記録〕 放下鉾 新町四條上小絡棚町俗に洲濱鉾といふ
 緣起 放下とは古僧の諸縁を放下したる者遊戯を以て譚佛乘の因となし諸人をす
 すめたるを放下師といへり鞆鼓をうちさゝら八撥又小切子の竹を打ち颯ひ舞ひな
 どしたるなり又幻師は物の色形を取替へ大を小になすなど總て人の目を驚かすこ
 とをする也今の世に手づまつかひなどいふ類歎又あやかり田樂法師等の品々今總
 て放下師とよぶこといにしへの放下僧より起れり然ればさしたる子細もなした
 風流に作りたるもの歎云々

寄町 合十一町

〔月鉾町祇園會之記録〕 岩戸山 新町通高辻上町北町南町と兩町に分る 引山也

緣起 天照大神天の岩戸を出給ふ尊容をうつし奉る云々
 人形 天照皇大神宮白衣前に鏡をかくる伊弉諾尊山の屋根の上におり衣裳唐冠を
 いたゞきそはつき半切太刀かたな三ふりにて手に釣竿のごときものを持戸隠大明
 神唐冠をいたゞきもぬぎ水衣のごときものを着す人形三神とも新作也
 寄町 合四町

〔月鉾町祇園會之記録〕 船鉾 新町通綾小路下袋屋町當町も南北兩町に分る

緣起 神功皇后の三韓退治出船をうつす
 人形 神功皇后天冠錦大そで鎧大口矢をかひ弓を持鹿島大明神立帽子錦大袖鎧唐
 うち長刀を持安曇磯良赤熊に龍王半臂半切手に椀理と云ふ木瓜の形にて足のつ
 きたるものに玉をのせ持也
 奇瑞 神功皇后の像腹帯をし給ふ也安産をねがふ人のために數をかさねかき是を
 毎年にとりて箱に納置きて古きを産婦にかしあたふるに必無難に安産する事奇瑞
 なり

〔祇園會之記録〕 橋辨慶山 四條坊門烏丸西入町橋辨慶町

緣起 源義經武藏坊辨慶五條の橋にてたゝかひて義經終に辨慶を組伏せ主従の契
 約をなしたりとぞ是世上にいひふらしたる事なれば委しく記すに及ばず

寄町 合三町

●編者云明治二十九年七月十一日發行の八坂神社祭禮行列案内には橋辨慶山下京區
 蛸薬師通烏丸西入とあり

〔八坂神社調書〕 橋辨慶山 一牛若丸人形丈五尺 一同裝束白茶錦小袖白羽二重下

着白茶紗金織水干赤地金織水干本紅錦大口紺地蝦夷錦大口右兩様相用 一太刀一
 振大永年中盛光作 一同一振享保年中近江守源久道作 太刀木刀差添木刀脛當花
 色地龍錦前掛唐繡龍後掛 一左右明幕加茂祭之圖 一花色地龍錦前掛 一水引綴
 錦百兒之圖前後左右共 一小水引猩々緋花之丸圖 一金滅金角金物雲模様四金房
 付一白幣四本 一見送綴錦龍織 一猩々緋明幕前左右 一水引淺黃龍模様蝦夷錦
 前後左右共 一黒塗橋板高欄擬寶珠真鍮 一淺黃絲房内二赤廿掛 一白茶織物後
 掛 一白茶錦小袖白羽二重下着付

(祇園會之記録) 八幡山 新町通三條下町三條町

寄町 合一町

(祇園會之記録) 鯉山 室町通六角下町

増補縁起 續近世時人傳云洛屋町三條の南なる商家のうら家を借り住む ありさ
 したる産業をなすともなくて日毎に酒をのみ又魚を買へば人を養ふとしてくら
 しけりある時彼商家の妻夫にむかひていへらくかう常の業あるがうへに家をも持
 すながら只いとまなきにいつ心を休めてたのしむといふこともあらざむゆるに此
 うらの を見れば何をよすがともなきとうらやましされば今更好まぬ酒をのみて

もたのしかるべきにもあらずされば今より日ごとに酒さかなの價をはかりて除置
 きなむやといへるを夫もげにとておもふにまかせしに一年に餘りて十片の金つも
 りけりさるに夫ことありて近江へ行さける時彼十片の金を出だしこれもてわたに
 ても買來り給はゞ徳つきなむといへればやがて携へいでしに大津の石場にいたり
 船にのらむとしてあやまちて海へかとしけるいかにともせむすべてなければ心ざ
 す所へゆきて四五日經て家に歸り其よしをかたりしかば妻もいと本意なくかもひ
 けれどかゝることもすくせの故ならむ身におはぬ金なりとかもひはるけてすこし
 けるがしばしありて大津の魚商人大なる鯉を荷ひきたりて求めたまへと勧めしを
 望なきよしいひしかば既にかへらむとせしに彼うらの きつて例のごとくこ
 れを買はむと□なしてたゞちに庖丁しければ腸のうちに紙つゝみて金十片ありか
 ねて家主のかとしたることを聞きたりければとくもてゆきてしかぐのよしをの
 べてわたしたればこれは我物にあらずその買給へる魚のはらにありし金なれば
 そこの物なりとて戻しけれども首をふりて其まゝ置きかへりしが家主やまず又も
 てゆきて與ふ婦もかたくうけず互にいひつゝのりて高聲にあらずひしにあたりの人
 人よりつとひてとりあつかへどもきゝいれざるによりせむ方なく官に訴出でけれ

官にも互に清廉なることを感じたまひ汝等がおもむきを後世に傳へむことをよからめ其十片の金にて左甚五郎に鯉をほらせ(此ころ同町に住める名譽の細工人なり) 祇園の山につくりて鯉山と名づくべきよし仰せければ其ごとくいとなみ今も其所に残りて年々六月十四日のかざり山とす

寄町 合五町

(祇園會之記録) 鈴鹿山 烏丸三條上場之町

縁起 鈴鹿御前女體にして惡魔を退治し給ふ故に形をあらはす又むかし鈴鹿山に立るばしといふ鬼あるを退治したる姿なりと世の人の説を用ゐて其體をうつせり 増補古例 人形鈴鹿御前の木像常は祇園社神輿會に預け置十二日町内へ持ちかへり十四日山渡りかへると又祇園社へ預けかく也

人形 鈴鹿御前木像の上に面をかくる古面別にあり町内の庫中に納む左の手に長刀を持ち右の手に末廣を持つ金の立烏帽子かつら帶を着し衣裳赤地錦小袖紺地綿つば折の□のかたをぬき緋せいどの大口をはき石の帶を着す長刀作不知

寄町 合十町

(祇園會之記録) 觀音山 新町通六角下町六角町

紀州爲凶徒退治所發向也殊祈禱可被致懇誠之狀如件

貞和三年卯月廿三日

直冬判

少納言法印御房

(八坂神社所藏古文書)

凶徒對治祈禱事近日殊可致精誠之狀如件

觀應元年七月廿八日

御判

助法印御房

凶徒對治祈禱事殊可致精誠之狀如件

觀應元年十月廿八日

御判

助法印御房

(祇園社記續錄)

御祈禱卷數一枝令入見參候訖殊以目出度候依執達如件

正平九年九月八日

修理亮判

祇園執行御房御返事

祈禱事善進幸晴於出雲國□□條尤以神妙爾可抽精誠之狀如件

正平九年九月廿六日

七十四 判

祇園祠官法印御房

依若君様御誕生御神馬一疋黒駁可牽進之由所被仰下也依執達如件

永亨八年正月十三日

大夫判官判

祇園社執行

祇園社年始御神馬一疋 鹿毛御□皆具自若公様可引進之由被仰出候也依執達如件

永亨九年正月五日

伊勢守判

祇園社御師

(祇園社記) 公方様御社參事康正三年丑二月廿五日早朝御與二玉堂之前ニ御立アリ 其ヨリ御カチニテ西ノ土戸ヨリ玉牆ノ内へ御參アリ則床ニ御着座アリテ御幣ヲ諸 大夫傍ヨリ捧申テ日野殿御取有テ公方様へ被進其時御幣ヲ取召テ御床ノ上ニテ三 度御拜アリ其後社家顯宥給テ御棚ニ置申御啓日アリ 神物者御馬一疋御神樂用途千疋仍廊御子禮堂ニテ御神樂ヲ奏ス御神馬ハ月毛請取 手ハ山本掃部助ナリ御前引マハシ申 (八坂神社所藏古文書)

祇園社御神馬三疋 黒月毛河原毛 可牽引之由被仰下候也依執達如件

長祿四年六月五日

伊勢守判

祇園社御中

祇園社御神馬一疋 青氏 爲 太上様御祈禱可引進之由所被仰下也依執達如件

寛正四年七月廿八日

伊勢守判

祇園社御中

就今日祭禮御太刀一腰 持 神馬 一疋所被牽進之狀如件

明應九六月七日

清房判

太刀一腰 金伏輪 神馬一疋 青 引進候啓曰候者悦入候祈禱事憑存候恐々謹言

二月二十五日

道端判

寶壽院

爲左曆之嘉祥祈禱之守牛王壇供等之祝着之至ニ候依太刀一腰進之候猶三塚隼人佐 可申候恐々謹言

永祿三正月十一日

承禎判

祇園執行寶壽院

八坂神社所藏古文書

祇園社 御願書 敬白

今度大政所殿様就御煩於御本復者以御奉加

一萬石可致再興條々事

一御寶殿御修理之事

一御興假屋再興之事

一御興御裝束調可申事

一隨殿再興之事

一大鳥居御興 附二之鳥居三之鳥居建立之事

一日神供可參之事

一常燈五ツ不可有懈怠之事

一日々護摩不可懈怠之事

一社内諸末社再興之事

一關伽井殿屋再興之事

一誦經堂再興之事

一外廊再興之事

一每月湯立可參之事

右意趣者 大政所殿様御煩彌被成御本復除病息災延命如意長久由抽丹誠奉祈御願

狀如件

天正十六年六月廿一日

社務執 行敬白

供僧寶光 院敬白

供僧竹 坊敬白

供僧松 坊敬白

供僧梅 坊敬白

供僧新 坊敬白

(倭漢合運指掌圖) 承應二癸巳十ノ二祇園社造營事始

(八坂神社舊記) 承應三年甲午年十一月廿一日將軍右大臣源家秀公本殿攝末社南樓

門西樓門等總テ改造セラレ神寶數種其他諸具ヲ調進セリ

八坂誌卷六終

八坂誌卷七

走馬奉納の濫觴

六十一代朱雀天皇の承平四年伊豫掾藤原純友反き同六年南海に寇
 なす平將門も亦叛心を企て、惡徒に交る一日將門純友と携へて叡
 山に登り皇城を下視して覬覦の志を純友に告ぐ純友賛同し與に大
 事を議り情實を匿さず他年事成らば將門は帝位を踐み純友は國政
 を攝らむと約り東國と南海とに分る將門は關東に勢を得精兵八千
 餘人を率て常陸國を襲ひ大掾平國香を殺して遂に一國を奪ふ時に
 天慶二年十二月なりき尋て上野下野の二國を取り上總下總安房相
 模伊豆等の國々皆靡き八州敵無きに至る既にして下總國相馬郡に
 城を築き平安城に擬ふ左右大臣大將以下文武百官の儲あり其狀勢
 幾朝廷に異ならず純友は南海に凶徒數千人を招聚め四國を剽掠し

て備前國に赴き中國西海並震動す同三年藤原秀郷平貞盛兵四千に將として將門の兵數萬と戰ふに勢當りがたし貞盛皇城守護の八坂大神に祈り乃將門を射る將門矢に中りて馬より落ち秀郷直に馳り將門を斬る官軍始めて勢を得興世王藤原玄成及將門の親屬等都て百九十七人を生捕り敵軍潰れて關東平ぎぬ東國の亂稍鎮まりしも西南の賊猶倭ます同四年四月純友大軍を放ちて太宰府を襲ひ急に攻めて其城郭を焚き官財を奪ふ五月小野好古諸軍を率て西海に向ひ博多津に到り純友の大軍と戰ふ敵軍猖獗勢當りがたし是に好古八坂大神を勸請し神威を頼みて更に戰ふに賊兵忽辟易して皆船に乘る官軍賊の船中に攻入り斬獲無數遂に賊船八百餘艘を奪ふ六月純友伊豫國に歸り橘遠保の爲に擒はれ誅に伏す西南茲に平ぎき同五年六月二十一日右賊亂鎮遏の報賽として天皇右近少將良峯義方を遣し走馬十列及東遊幣帛等を八坂大神に奉りたまふ騎者左右近

衛各五匹陪從亦兩府五人裝束は賀茂祭に同じ竟に恒例となれり

(本朝通鑑廿六) 天慶己亥二年冬十一月平將門反於關東將門桓武帝五世孫故陸奥鎮守府將軍平良將子世住東國自幼好勇善騎射曾在洛陽仕藤忠平十餘年忠平恩遇頗厚將門請任檢非違使忠平不許將門快々稱病不仕忠平逐之東國將門彌快々承平年中始企叛心結交惡徒云々與藤純友相善一日携純友登比叡山下視平安城曰美哉皇居在吾目中純友悟其言謂將門曰大哉公之志吾雖不肖幸修芳交豈不贊成之乎將門大喜與談大事不匿情實且約曰他年事成志遂則吾皇孫也宜踐帝位卿藤氏之胄也宜攝國政既而將門歸關東純友行南海其邪謀云々將門威猛倍前國中諸士來從太多到此遂反云々率精兵八千餘人襲常陸國與大掾平國香戰大敗之屠獲無數遂殺國香奪常陸國云々十二月平將門將數千兵向下野國云々收其印鑰遂弘雅等於關外於是國中無敵將門乘勢直到上野國擊其不意縛國守藤尙範入國府固四門將門威名太熾上總下總安房相模伊豆五州望風草如靡云々既而築新城於下總國相馬郡擬平安城云々其經營一如京師左右大臣大將以下文武百官並置焉云々藤純友在南海聞平將門作亂日時已至矣不可失也招聚亡命彌起海島居數日凶徒來屬者數千人乃赴備前國云々兵勢恢張剽掠日滋山陽山陰西海爲之震動庚子三年平將門聞藤秀郷平貞盛來攻自將兵迎戰將門兵數萬人秀

郷貞盛兵四千人相戰移刻云々貞盛揚聲曰爲君抽忠爲父復讐當在今日乃射將門將門中矢而斃秀郷直馳手刃其頭於是興世王藤玄成等及將門親屬悉爲官軍被獲都盧百九十七人其餘或自殺或乞降關東平云々九月詔左少將正五位下小野好古爲追捕使長官云々辛丑四年夏四月藤純友襲太宰府放兵急攻焚其城郭悉奪官財府外士民之宅屠戮無遺外都變爲曠野西海諸州爲之慘愴五月授小野好古從四位下勞軍務也小野好古聞藤純友屠太宰府大駭率諸軍取陸路向西海旌旗相連晝夜兼行會純友於筑前國博多津邊奮呼大戰云々賊兵辟易退而乘船官軍乘勝繼入賊船斬獲無數遂奪賊船八百餘艘云云六月藤純友乘扁舟歸伊豫國殘卒僅數十人耳警固使種遠保率步卒二百人往擊之純友不能拒之遂爲遠保被擒云々既而純友伏誅海賊平

(古老傳) 天慶の亂のとき平貞盛祇園の神に祈り靈驗を得て將門を平々關東各國に祇園社の多きは其縁起なりと云ふ

(筑前國續風土記一) 櫛田宮 博多町の境内に有下皆しかり 祇園社附 祇園社は素盞鳴尊也此神鎮座の初は朱雀院御宇天慶四年藤原純友誅伐初度の追討使小野の好古朝臣博多の津にて合戦あり神の助を祈む爲此處に山城國祇園を勸請せりと云(石城志三) 祇園社は素盞鳴尊也云々神の助を祈らむ爲此處に山城國祇園社を勸請

せりと云 今按に祇園社勸請有しは櫛田社御鎮座より百八十餘年後也九州軍記に小野好古朝臣博多津にて合戦あり其功遂がたきによつて東長密寺の法印阿闍梨尊圓と心を合せて山城國祇園大明神を勸請すと云々續風土記五那珂郡下云岩戸の郷一の瀬山田村の伏見社合殿に祇園社あり神體は木像にて古し里人の云昔博多焼亡せし時此所に祇園の神體を持來りて當社に納め置といふ

(口碑) 昔小野好古朝臣が藤原純友を伐ちし時空中より石劍飛降りて多くの敵を斃し官軍利を得て西海平ぎ人々祇園の神の加護なりと傳へて博多の祇園會今に盛大なりと云ふ

(日本紀畧二) 天慶五年六月廿一日癸酉奉東遊走馬十列於祇園社依東西賊亂御賽也(年中行事秘抄) 六月 祇園獻馳馬例 天慶五年六月廿一日主上使右近少將良峯義方奉馳馬十四感神院天神賽先年兵亂之祈騎者左右近衛各五匹陪從亦兩府五人裝束同賀茂祭等

八坂誌卷七終

八坂誌卷八

臨時祭の事

臨時祭の行はるゝ其淵源二あり一は清和天皇の御世以來疫病の流行する度ごとに奉幣祈禱し其靈驗の炳焉なるに感けて終に臨時の奉幣定式となる一は朱雀天皇の御世平將門藤原純友東西に亂を作し奉幣祈禱して其効著く走馬東遊勅樂等を奉りて報賽し其後攝關の專横或は朝威を凌ぎ人心の惑亂或は天災地妖を招き恐懼慙惕上下躬の措く所を知らず茲に貞觀天慶等の例に因準して天延三年に嚙失し天治元年以降毎年六月十五日を以て幣帛走馬東遊勅樂等を奉り臨時の祭式を行ふこととはなりぬ宮中には御湯殿御禊等の諸式あり勅使は五位の殿上人なり又宣命あり但宮を用ゐて内覽草奏等の事なし儀式大約平野に同じ東遊には天延の例に因り

神かせの八坂の里と今日より君が千年はかろへはじむる
といふ歌を奏づ用途は米三百九十一石六斗五升と銀三百一匁外に
油一斗一升七合と稻大豆小豆大麥小麥各九升を儲ふ又志氏紙十六
枚と上品紙三十帖と淨衣一領と白絹四丈と承仕の淨衣の布一段と
氈敷布一段と名香沈香丁子白檀薰陸龍腦等は納殿より備へ紙一丈
と裏布一丈と串一支とは修理所より備へ折敷卅九枚と長櫃二合と
杓桶各二柄と裏薦二尺とは御庄所より備へ乘尻の摺袴の布四段と
同櫛舎人の袴の布一段と仕丁の褌の布一段と膝突の麻布一段とは
年預所より備へ蘇密は贄殿より備ふ猶御鏡奉御の時は御倉町より
鑄物師を召して禊齋せしめ東三條殿の北馬場を掃除して砂を敷き
注連を廻らし清淨なる銅を求めて鑄琢かしむ鑄物師へは清淨布五
段を給ひ又饗す奉御の御使は家司下家司にして祝師には祿あり作
業の大體には多少の差ありさて其概畧は圓融天皇の天延二年主上

疔瘡の御惱ありて其平癒を祈らせたまひ翌三年六月十五日報賽と
して走馬勅樂東遊御幣等を奉らる勅使は從四位下藤原季平とも右
近少將藤原理兼とも傳ふ中宮職奉幣し參議源惟正行事たり太政大
臣藤原兼道參向左右御馬各五疋公卿上官左近衛右近衛等の官吏供
奉す三條天皇の長和二年六月十五日神馬十列を奉り攝政上達部五
六人を從へて參向す上官祿あり後一條天皇の寛仁二年六月十五日
金銀の御幣例幣及神馬十列等を奉らる左大臣藤原道長參向左近衛
大將教通左衛門督賴宗中宮權大夫經房權中納言能信右衛門督實成
伊豫守兼隆左大辨道方修理大夫通任右大辨朝經等供奉す崇徳天皇
の天治元年六月十五日是より先屢々臨時祭行はる是に至りて勅使
の事宣命の事御禊の事御湯殿の事神社宮中共に其諸儀式の規定成
る是を以て是歲始めて行はれしと謬傳す近衛天皇の久安三年六月
十五日奉幣但春日祭の興福寺の佛事に於ける例に倣ひ延暦寺の事

に依り忌なし同六年六月十五日奉幣藤原頼長の養女二位多子鹿を食たるの故を以て前日他所に遷さる久壽元年六月十五日神馬乘尻を發遣せらるゝこと例の如し高倉天皇の嘉應元年六月十五日是日臨時祭に依り御禊あり内藏寮舞人等の裝束を調進す行事藏人右衛門尉親光出納尙親等藏人所にて檢視分配し舞人着用して歸る右近の陣にて饗饌を差てり頭中將陪膳藏人少輔役送左兵衛佐季能勅使藤右衛門督宣命安元二年六月十五日六條上皇の御不豫に依り臨時祭なし七月十七日上皇終に崩じたまひぬ治承四年頼政謀叛し頼朝兵を擧げ關東關西に戦ひ東大寺興福寺三井寺並兵燹に罹る此穢に依り六月十五日の臨時祭停む安徳天皇の壽永元年是歲北陸の諸國義仲に歸す朝廷故障ありて六月十五日の臨時祭に奉幣せられず後鳥羽天皇の文治三年六月十五日神馬十列を立てらるゝこと定例の如し但御幣は一串なりき陪膳彈正太弼資泰奉行仲盛勅使散位藤原

基清陰陽師天文博士廣基建久二年六月十五日神馬十列を發遣せらるゝこと常の如し陪膳光重勅使有頼奉行仲盛陰陽師晴光等なり四條天皇の曆仁元年六月十五日臨時祭例の如し兵部權大輔季盛勅使たり御湯殿なきに依り御禊行はれざりき龜山天皇の文永四年六月十五日臨時祭常の如し勅使治部權少輔兼俊奉行藏人皇后宮權大進宣命下卿大炊御門中納言朝中の儀式は五條殿にて行はれき後二條天皇の嘉元元年六月十五日臨時祭常の如し後村上天皇の正平四年六月十五日臨時祭常の如し後花園天皇の寶徳元年去年洪水地震疾疫飢饉等の諸災あり是歲又四月以降數日の大地震あり是を以て六月十五日に行ふべき臨時祭十二月廿日に行はれたり同二年六月十五日臨時祭常の如し勅使法性寺侍從藤原雅保奉行藏人右兵衛佐經茂御拜以下定例に異ならず孝明天皇の元治二年再興あり當日早旦惣官祠官以下社殿に昇り内陣の東に列席す先拜禮次に社務以下御

九十一
簾を捲く次に開扉此間里神樂を奏つ次に獻饌次に社務祝詞を奏す
此間奏樂次に奉幣次に臨時祭再興の祝詞次に中臣祓次に三種祓次
に拍手次に御簾を垂る是時別勅陪從參向あり大和大路の石橋より
鳥居の外まで素襖を着たる神事の觸役嚮導す鳥居の内より中門ま
では淨衣を着たる社人二人嚮導す次に禁中御進發御催の注進あり
神事觸役の輩大和橋へ出迎す次に使及舞人陪從等參向し鳥居の内
にて下馬東西に相對立す此行列堺町御門を出づる時注進出迎し掃
部寮舞殿の中央に宣命の座を敷き社福幣殿に八脚の幣案を供へ仕
丁舞殿の北の庭に御幣櫃を安置すべき料の葉薦一枚を敷く傳奏奉
行參向して社頭の具否を問ひ後に參進を催す執奏方仰告を奉じ先
勅使次に内藏寮次に御幣櫃南の門を入り中門を過ぎ舞殿の西を經
て北庭の中央なる葉薦の上に入り居り次に和琴但中門の外に留まる
次に御馬次に舞人先下薦たり次に使次に陪從次に人長次に御馬六

九十一
疋を南の中門外の西の方に牽立て使其門を入り西の廊舎にて劍を
解き手を洗ふ主水司預れり陪從以下廊を經て舞殿の巽の庭に立つ
南の中門内東の廊の前に西上北面人長列末にあり別使歌人は陪從
の上頭に立つ此間内藏寮の官吏及史生衛士等並參進す次に官吏御
幣を取出して供僧に授け供僧其を外陣の案上に置く其空櫃は官吏
南の中門外に昇出す次に使舞殿の南の階を昇り着席す次に宣命を
讀む此間外陣列席の社官等座を降りて蹲居す次に使福官を召して
宣命を社務に賜ふ社務其を神前に供ふ次に福官四箇の官幣を捧げ
て神前に供ふ御幣は並紙捻を以て結び内陣に入り解きて一座を
とに奉る次に使座を起ち廊舎に入りて劍を帶ぶ次に舞人三度御馬
を引廻し先北の庭に引立て東上北面一揖して後南の中門外に牽出
す次に狩衣着用の社人二人前行して將軍家の馬を三度引廻す次に
掃部寮宣命の座を撤す次に社司幣殿の案を撤す次に仕丁北の庭な

る薦を撤す次に舞人舞殿の坤の庭に列立す東上北面次に使參進して舞殿の巽の庭に立つ別使陪從以下列立北上西面次に東遊兩舞して退出次に使已下南の門外に出で馬場の上頭に到り東面して胡床に居る次に舞人御馬を馳す先上臈たり御馬は南に到り更に北に向ひて馳す此間執奏家兩家の輩を以て勅樂を催さしむ次に使以下休幕に入る次に勅樂但舞殿の北の庭にて左右に相分れ萬歳樂と延喜樂と賀殿と地久とを奏つ此後各休憩兼日舞殿の北の庭に御神樂屋を設けたり東西六間南北四尺柱ごとに燈燧を懸け神人時々油を加ふ又賢木の枝を柱の下に樹て木綿を四隅に垂て庭上に庭燎を設く良と巽の庭燎は主殿寮の預かる所にして乾と坤の庭燎は社中の預かる所なり又御神樂屋より本殿に接きて軒下に白砂を布く當日午後に至り主殿の官吏庭火を焼く寮官圓座に着す西向次に使以下庭上の座に着く次に人長立ちて行事次に使以下座を起つ先下臈たり

次に人長掃部寮に仰せて軾を敷かじめ又笛筆篳和琴等を召し詔りて本末の座に着く次に使以下復座掃部寮軾を撤す次に神宴次に人長細男を召す先使本末拍子笛筆篳和琴次に使仰星次に使以下各座を起つ先下臈たり次に人長賢木の枝を執奏家の休憩所に持參して兩家の輩に渡し兩家の輩其を神前に獻る次に使已下退出是より先神人中門の御帷を褰ぐ南の中門の下にて執奏家無異の趣を聞き退出を命ず次に御簾を褰ぐ次に神饌を撤す此間奏樂但捨翠樂を奏つ次に閉扉次に神拜拍手次に御簾を垂る次に祠官以下退出

(簾中抄上) 六月十五日ぎをんのりんじの祭

(禁秘御抄中) 一神事次第 祇園臨時祭云々已上小祀當日神事也皆有御湯殿有御禊

(夕拜備急至要抄上) 六月 一十五日祇園臨時祭 其儀同辛野 使 五位 御禊

陪從役送御物

(四季物語) 十四日の日なんかみの園生の御祭いとなみわたさるゝことなるべし檢非違使の廳より別當宣を蒙りて次第を申沙汰し看督長のこらすつかうまつれり六

十あまり六つの國の守よりさいの鉾奉り幣さへけ奉るなり此民くさのねやみをつかさどらしめ又いやし給はんの御らかいしるければ主上もあたにし給はで十五日のつとめての時はとくしすないもの申あるときは内のしるす司なままいりつかうまつれり執柄の御車宿りなとしつらいてこゝにて儀式してねりを勤めらるゝとぞ執行の房あるは權の三綱なと幣を勅使にかつけぬれば拜して感神院の塔婆のかたへにしぞきて神供のおがるうち樂人をめして樂器を奏せしむることなり

(次嶺經) 祇園臨時祭 昔ハ禁中ヨリ五位ノ殿上人勅使ニテ東遊ヲ奉レシヨシ云々
(建武年中行事) 祇園會臨時祭 十五日りんじのまつり御けいあり平野に同じ御坐南むき御拜のはとたつみにむかわせ給ふすべて御殿にて東庭にむけすたよりにしたがつひて南北にむけて供するなり

(師光年中行事) 六月 十五日祇園臨時祭事 以殿上人五位帶劔人為使文官又有例
(吹塵錄三十五) 皇室追加 御貢獻米并定例御下行 祇園臨時祭 一米凡三百九十一石六斗五升 銀三百一匁

(執政所抄下) 六月 十五日祇園御幣神馬事 使五位 御幣一捧志氏紙十六枚納殿紙一丈裏布一丈串一支修理所裏薦二尺御庄所已上於出納任例調備之 乘尻摺袴布四

段同籠舍人袴布一段仕丁禪布一段膝突麻布一段已上年預所沙汰神馬御腕如例乘尻小使陪膳藏人所同之陰陽師小使下家司政所同之御襪具出納同之大治元年各一俵之協御幣北政所三俵以御封勤仕之歟姫御前三俵納殿沙汰歟已上仕丁政所催之 同

天神供三夜事能米十五石油一斗一升七合已上成下文自納所成所有之 上品紙卅帖淨衣一領白絹四丈承仕淨衣布一段氈布一段名香沈香丁子白檀蕪陸龍腦已上納殿蘇蜜已上贊殿折敷卅九枚長櫃二合杓桶各二柄已上檜物御庄兼日申成御下文下知之又庄家故而造儲之歟五穀四斗五升 各九升稻大豆小豆大麥小麥已上政所出納備進之 件事兼日以例文殊致清淨沙汰奉行下家司皆催調十二日書送文申少輔殿御文遺橋下權別當桓勝房召請文遺覽之但御鏡三面奉御之時鑄物工人召御倉町各其身禊齋占東三條殿北馬場掃除敷砂引廻注連尋召清淨銅鑄之令琢瑩之清淨布五段給之襷出納等勤之 御鏡奉御時家司下家司一人為御使祝師在祿

(日本紀略六) 天延三年六月十五日丙寅被公家始自今年被奉走馬并勅樂東遊御幣等感神院是則去年秋依疱瘡御惱有此御願今被賽也是日也太政大臣參向感神院公卿上官供奉中宮職奉幣同社有東遊等使亮從四位下藤原季平
(年中行事秘抄) 六月十五日走馬勅樂等事天延三年六月十五日公家自今年於感神院

被奉走馬勅樂東遊依去年飽瘡事也上卿不參參源惟正卿參入行事右近少將藤原理兼爲使左右御馬各五正左右官人已下供奉東遊歌云

神カセノ八坂ノ里ト今日ヨリソ君ガチト世ハ計始ル

(二十二社注式) 祇園社 臨時祭 第六十四代圓融院天祿三年六月十五日始奉走馬

勅樂東遊御幣等使云々此後中絶第七十五代崇徳院天治以後每年相續

●編者云天祿三年とあるは天延三年の誤なり

(諸神記) 祇園 臨時祭 天延三六十五始被奉走馬勅樂東遊御幣等使左少將藤原兼

左右御馬有五正左右近官人供奉東遊歌云

神風ノ八坂ノ里ト今ヨリソ君ガチト世ハ計始ル

此後中絶崇徳天治以後每年相續

●編者云天延三年以後中絶としたるは並誤なりとす三條天皇の長和二年後一條天皇

の寛仁二年等の例あればなり

(法成寺攝政記) 長和二年六月十五日乙亥午時參祇園神馬十列如常上達部五六人許

被相從別當禰一重三綱祝願各正見還來上官祿如常但無饗是例也

(小右記) 寛仁二年六月十五日丙寅今日祇園御會仍奉幣子女同奉幣宰相參大殿縁扈

從參給祇園之御共左中辨來云可騎之馬極凡者借與厩馬了宰相申刻許歸來云大殿唯

今歸給此間兩脚不止被奉金銀幣例幣神馬并十列至神馬被長奉又有御諷誦給院司等

祿法印院源祇候院儲饗撰攝政引卒上官等被參候大殿御共之卿相左大臣教通左衛門

督頼宗中宮權大夫經房權中納言能信右衛門佐實成伊豫守兼隆左大辨道方修理大夫

通任右大辨朝經資平云々

(永昌記) 保安五年六月十五日庚申今日公家御奉幣侍從中納言於伏屋行之云々使右

少將公隆近衛官人十人奉仕舞人陪從四人裝束藏司宣命云有所思食限永代自今日禮

代幣帛走馬東遊神樂等調備給者天延三年貞觀年中有此例云々可有臨時祭之由世以

云

●編者云保安五年は崇徳天皇の天治元年甲辰に當れり故に永昌記所載の事實は師遠

年中行事以下の事實と二途ならず

(師遠年中行事) 六月 十五日感神院臨時祭使殿上五位天治元年初有此慶舞人近衛

府番長

(年中行事秘抄) 六月 十五日祇園臨時祭の事被立臨時祭使 殿上五位 天治元年

始之如平野祭又東遊音樂被調獻有宣命

(本朝神社考上) 祇園臨時祭者六月十五日也崇徳院天治元年六月始焉御禊儀式同平野勅使殿上五位奉東遊有宣命今日又有走馬勅樂東遊歌云神代之八坂能里登今日與利曾君我千年播箇素倍波志武留八坂郷者今祇園也山城國愛宕郡八坂神社是也
(百練抄六) 天治元年六月十五月初有祇園臨時祭

(年中行事) 六月 十五日祇園臨時祭事 天治元年始被立臨時祭使 殿上五位 中納言實隆卿參陣有宣命又東遊音樂被調獻其後爲年事

(公事根源) 六月 祇園臨時祭 十五日 御禊などの儀大かたは平野に同じつかひ殿上五位東遊を奉らる宣命有天治元年六月よりはじまる又けふ走馬勅樂などあり天延三年の東遊の歌に曰く

神かせの八坂のさとと今日よりぞ君が千年はかぞへはじむる
八坂の里とはいまの祇園なり山城國愛宕郡八坂郷といふ所に神社を作られたる故なり

(柱史抄上) 六月 十五日祇園臨時祭 其儀同平野祭也 宣命 用管無内覽草奏等天皇我詔旨度掛畏岐祇園天神乃廣前爾云々 年六月十五日 崇徳院天治以後有此事歟

(台記) 久安三年六月十五日丁未依祇園御會奉幣不念誦始中堂精進任佛事可忌之依延曆寺事不忌之猶春日齋不忌興福寺佛事 六年六月十五日庚申是日依例奉幣祇園依此事昨日二位遷他所 明日歸京 食鹿之故也 仁平四年六月十五日丁酉神馬乘尻發遣祇園如常

●編者云仁平四年は久壽元年甲戌に當れり

(兵範記) 嘉應元年六月十五日庚子參内祇園臨時祭有御禊内藏寮調進舞人等裝束行事藏人右衛門尉親光出納尙親等檢知於藏人所分賜之即著用歸參於右近陣差饗饌如例申刻御禊御殿東弘廂御座等儀同前頭中將爲陪膳藏人少輔益送左兵衛佐季能爲使右衛門督藤原卿奏宣命給使下官依輕服日數不勤今日役也

(顯廣王記) 安元二年六月十五日戊子祇園臨時祭依穢停止云々

(年中行事秘抄) 六月十五日祇園臨時祭事 治承四年六月依天下死穢停止依先例也

(玉海) 養和二年六月十五日甲寅此日依祇園臨時祭神齋年來殊不神祭依障不奉幣也

●編者云養和二年は壽永元年壬寅なり

(吉記) 壽永二年六月十五日戊申秉燭之後參大内先雖伺陣座无人之間候殿上方頃之先被立祇園臨時祭使新中納言 頼 被奏宣命主上出御有御禊陪膳頭中將隆房朝臣

役送藏人少輔親經使民部大輔兼定良久之後攝政殿令參給於化德門內御隨身拂雜人之間諸衛隨身雜色等烏帽子多被打落殿下令昇給之後伴輩等打落前驅雜色御隨身從者等烏帽子是清經中將所從等所爲云々

(玉海) 文治三年六月十五日乙酉此日祇園臨時祭也予不參內云々又立祇園神馬十列如常但今度當社初度也幣只一串也陪膳彈正大弼資泰朝臣奉行中盛使散位藤基清非職也藏人五位 陰陽師天文博士廣基如他社例使必可參社頭之由以行事仰之兩三町騎馬相從其後以車參社頭云々經他小路建久二年六月十五日壬辰此日祇園臨時祭也上卿源中納言依御物忌陪膳宗賴朝臣役供光綱等同候使侍從能資云々未刻余退出爲發遣神馬十列也申刻小浴着束帶依雨中門儲座陪膳光重朝臣奉行仲盛使有賴陰陽師晴光等也

(百練抄十四) 曆仁元年六月十五日戊午祇園臨時祭使兵部權大輔季盛依無御湯殿不被行御禊也

(吉續記) 文永四年六月十五日祇園臨時祭也藏人皇后宮權大進奉行使治部權少輔兼俊宣命上卿大次御門中納言宣命大內記依爲例宣命不奏草云々還御之後於五條殿可有其儀云々

(公茂公記) 乾元二年六月十五日辛丑露今日還幸也云々今夜祇園臨時祭宣命師信卿奉行云々

●編者云乾元二年は嘉元元年癸卯なり

(園大曆) 貞和五年六月十五日祇園臨時祭

●編者云貞和五年は後村上天皇の正平四年己丑なり

(康富記) 寶徳元年十二月廿日乙未祇園臨時祭云々

(康富記) 寶徳二年六月十五日丁亥是日祇園臨時祭也使法性寺侍從藤原雅保也奉行藏人右兵衛佐經茂也御拜以下如例宣命少內記康顯作進之

(薩戒記部類私要抄) 藏人右衛門佐俊國送御教書云 表云中山中將殿 祇園臨時祭御禊可令候陪膳由被仰下候也 請文云 祇園臨時祭陪膳事尤可存知候之處之難治故障非一事可然之様可得御意候也恐々謹言

(感神院記錄) 元治二年御再興臨時祭式左の如し 當日尅惣官祠官參寶前神饌樂人着坐 依有疊敷入不設圓座 豫置樂器先神拜社務以下至供僧 次卷御簾 次御戸開 此間奏里神樂 此儀待 祭中御作法御催之注進奉仕兼而遠見之者附置 次神饌祝詞社務奉仕之此間奏樂 央宮樂 次奉幣 有當祭御再興 祝詞中臣被三種

被拍手等之事 次垂御簾 別勅陪從參向自大和太路石橋之邊至鳥居外神事觸役
 二人着素襖爲案内前行自鳥居內到中門舍人着淨衣二人案内前行 但勅使并傳奏奉
 行等參向給之時加列前案内同之退出給之時准之此儀待 禁中御進發御催之注進神
 事觸役輩出迎大和橋邊若遲々之時雖不待此告出迎
 使舞人陪從等參向於鳥居外下馬鳥居內相東西列立社務正官等候神殿之輩爲御戶開
 之間不出迎勅使最末供僧社人等出迎南門外
 此儀御列出堺町御門之時注進出迎 掃部寮敷宣命座舞殿中央 幣殿供幣案 白木
 八脚社司役之舞殿北庭敷葉薦一枚 東西行爲御幣櫃安置之料仕丁一人役之傳奏奉
 行參向問社頭之具否之後令催參進執奏方速見河端 兩家輩奉仰告 勅使并內藏官
 人等 先拂 次御幣櫃入南門中門經舞殿西昇居北庭中央葉薦上次和琴留中門願東
 方 次御馬 次舞人 爲先下薦 次使 次陪從 次人長 御馬六正引立南中門外
 西方下薦及口使入南中門給之後東上北面一列 使入南中門於西廊舍解劍洗手 主
 水司役之 陪從以下經廊代外東等立舞殿巽庭 南中門內東廊代前西上北面人長在
 列末 別勅歌人立陪從上頭此門內藏官人央生衛士等參進官人取出御幣授供僧
 西梅坊淳榮供僧置外陣案上官人昇出空櫃於南中門外次使昇舞殿南階着座讀宣命

二拜 候外陣社長等降座躋居社務正官等爲御戶開之間其儘着座 次使召祠官 社
 務 降階 東方庭上着沓 昇舞殿階候使傍使賜宣命於社務供神前之後更候使傍申
 返祝拍手二使應之給打交一人祠官正官第一 捧官幣供神前 御幣四棒以小捻結之
 入內陣之後解小捻每一座供之 次使起座入廊舍帶劍 次舞人引廻御馬 三度 先
 引立北庭 東上北面 一揖之後引廻了引出南中門外次引廻關東御馬 三度 社人
 二人衣體雁衣前行引廻之 次掃部寮撤宣命座次撤幣殿案社司役之次撤北庭薦 仕
 丁役之次舞人列立舞殿坤庭東上北面次使參進立舞殿巽庭 別勅陪從以下立使 北
 上西面 次東遊 兩舞了退出 次使已下出南門外到馬場上頭東面居胡床 次舞人
 馳御馬爲先上薦騎御馬至南更向北馳之此間執奏家以兩家輩令催勅樂 次使以下入
 休幕次勅樂於舞殿北庭左右相分奏之 萬歲樂 延喜樂 賀殿 地久 此後各休息
 到未半尅令催御神樂兼日舞殿北庭設御神樂屋東西六間南北三間四尺 每柱懸燈城
 神人役之又時々加油又立柳枝於柱下懸木綿舞殿四隅庭上設庭燎良異等庭燎主殿寮
 乾坤等社中社丁役之參中門御帷神人二人役之 柳枝從社中調進於執奏家休所御幸
 之間 被渡人長 次掃部寮敷御神樂座次主殿官人燒庭燎 寮官着圓座西向 御神
 樂屋北軒下接本官軒下敷白砂 次使以下着庭中座次人長主行事 次使以下起座爲

先下騰次人長仰掃部察令敷賦次人長召笛篳篥和琴等訖着本末座次使以下復座掃部
 寮撤賦 次神宴 次人長召才男先使本末拍子笛篳篥和琴 次使仰星 次其駒訖使
 以下各爲先下騰起座人長持參神枝於執奏家休所渡兩家輩兩家輩進神前獻之 次使
 已下退出先是盛中門御帷 神人役之於南中門下執奏家聞無異之後仰退出 次盛御
 簾次撤神饌此間奏樂 捨翠樂 次閉御戶 次神拜 拍手 次垂御簾 次嗣官以下
 退出

八坂誌卷八終

八坂誌卷九

行幸及御幸行啓の事

延久四年三月廿六日後三條天皇の行幸あり承暦元年十二月一日白
 河天皇の行幸あり寛治五年十月三日堀河天皇の行幸あり承徳元年
 四月同天皇の行幸あり天永元年十一月鳥羽天皇の行幸あり永久元
 年十一月同天皇の行幸あり天治二年某月崇徳天皇の行幸あり天承
 元年三月十九日同天皇の行幸あり保延五年正月廿八日鳥羽上皇の
 御幸あり久安元年十月近衛天皇の行幸あり同五年六月廿日鳥羽上
 皇の御幸あり同年十一月廿五日近衛天皇の行幸あり應保二年八月
 廿四日二條天皇の行幸あり建久五年十二月二日後鳥羽天皇の行幸
 あり正治元年十一月十七日後鳥羽上皇の御幸あり同二年二月十四
 日同上皇の御幸あり建永元年七月九日同上皇の御幸あり承元四年

正月廿日同上皇の御幸あり建保二年正月廿二日土御門上皇の御幸あり同年四月廿日同上皇の御幸あり同三年八月十六日同上皇の御幸あり同四年四月廿六日同上皇の御幸あり同五年十一月十七日同上皇の御幸あり同六年正月廿七日同上皇の御幸あり同年十二月廿一日同上皇の御幸あり承久元年十月五日順徳天皇の行幸あり寶治二年八月五日後嵯峨上皇の御幸あり建長三年二月十三日同上皇の御幸あり同六年二月廿三日同上皇の御幸あり明治十年一月十日皇后之行啓あり同年二月十四日皇太後の行啓あり

(扶桑略記廿九) 延久四年三月廿六日丙午行幸稻荷祇園

(濫觴抄下) 稻荷祇園兩社行幸延久四年壬子三月廿六日始之

(祇園社本縁録) 延久四年三月廿六日後三條院始テ當社行幸アリ此時稻荷祇園兩社ヘ行幸アリケレバ之ヲ兩社行幸ト申ケル東遊舞樂等アリ後代行幸アルトキハ皆此例ニ依テ行ヒタマヘルトナリ

(後拾遺和歌集廿) おなじ御時祇園に行幸侍けるにあづまあそびにうたふべき歌め

し侍ければ讀る

藤原經衡

千はやふるかみのそのなる姫小松よるづよふべきははじめなりけり

(法眼晴願記) 後三條院御代延久四年三月二十六日行幸被行御願誦

(水左記) 承暦元年十二月一日丁丑早且參南殿今日稻荷祇園行幸

(爲房卿記) 寛治五年十月三日戊午臨幸稻荷祇園兩社

(祇園社本縁録) 承德元年四月行幸アリ

(祇園社本縁録) 天仁三年十一月行幸兩社ノ行幸前々ノ如シ

●編者云天永元年ノ誤ナラム

(祇園社本縁録) 永久元年十一月行幸如先例

(祇園社本縁録) 天治二年□月行幸如先例

(長秋記) 天承元年三月十九日丙辰稻荷祇園兩社行幸也

(十三代要略二) 保延五年正月二十八日上皇參詣祇園

(祇園社本縁録) 天養二年十月行幸如先例

●編者云久安元年ノ誤ナラム

(本朝世紀) 久安五年六月二十日庚午入夜一院臨幸祇園

(本朝世紀) 久安五年十一月二十五日癸卯今日稻荷祇園兩社行幸也

(百練抄七) 應保二年八月廿四日稻荷祇園行幸也

(百練抄十) 建久五年十二月二日戊午稻荷祇園兩社行幸也

(百練抄十一) 正治元年十一月十七日上皇御幸日吉祇園北野

(百練抄十一) 正治二年二月十四日御幸日吉祇園稻荷等社

(明月記) 建永元年七月九日今曉賀茂祇園御幸

(百練抄十一) 承元四年正月廿日上皇渡御水無瀬殿先御幸祇園并八幡宮

(百練抄十二) 建保二年正月廿二日上皇渡御水無瀬殿先御幸祇園稻荷石清水宮等

(百練抄十二) 建保二年四月廿日主上自高陽院行幸閑院今日上皇御幸稻荷祇園社

(百練抄十二) 建保三年八月十六日上皇御幸賀茂稻荷祇園等社

(百練抄十二) 建保四年四月廿六日上皇渡御水無瀬殿先御參祇園北野社

(百練抄十二) 建保五年十一月十七日上皇御幸祇園稻荷等社石清水宮

(百練抄十二) 建保六年正月廿七日上皇女院御幸祇園稻荷石清水宮

(百練抄十二) 建保六年十二月廿一日今曉上皇御幸祇園日吉等社

(百練抄十二) 承久元年十月十五日丁卯行幸稻荷祇園社

(百練抄十六) 寶治二年八月五日己卯上皇御幸稻荷祇園社

(百練抄十六) 建久三年二月十三日癸卯上皇御幸稻荷祇園社

(百練抄十七) 建長六年二月廿三日丙寅上皇御幸祇園北野廣隆寺嵯峨等

(八坂神社日誌) 明治十年一月十日皇后行啓

(八坂神社日誌) 明治十年二月十四日皇太后行啓

八坂誌卷九終

八坂誌卷十

祇園會張弛の事

清和天皇の貞觀十一年疫病天下に流行しト部日良麻呂勅を奉け長
 三丈ばかりの矛六十六本を建て六月七日御靈會を行ふ是祇園御輿
 迎の嘴矢なり同十四日洛中の男兒と郊外の百姓とを率て神輿を神
 泉苑に送り祭禮を行ふ是祇園御靈會の濫觴なり圓融天皇の天祿元
 年六月より毎年六月十四日に御靈會を行ふと定式となれり一條
 天皇の長徳四年京中の雜藝者无骨と稱して材を造り渡御祭に擬し
 て諸人に見物せしむ材の作法宛大嘗會の標を引くが如し翌長保元
 年左大臣藤原道長彼无骨の事を聞き停止の宣旨を下し猶檢非違使
 を以て追捕せしむるに无骨疾く聞知りて逃去りぬ時に八坂大神太
 く御怒りまして人に託宣したまひき祇園會に種々の興を作すは是

其縁起なり同三年の祭禮其盛大なること例年に十倍す後一條天皇の長元九年四月十七日天皇崩じ爲に六月七日の祭禮延引し同月廿一日御輿迎ありて同廿六日御靈會を行ふ堀河天皇の康和五年六月十四日祇園御靈會を行ふに際し先例の堀河を改めて三條大宮を列見の辻と爲す長治元年六月の祭禮殊に盛大にして諸親王見物したまふ鳥羽天皇の永久二年六月七日御輿迎あり雜人市を作す崇徳天皇の大治五年六月十五日祇園御靈會あり宣命上卿左兵衛督實能使殿上人五位右兵衛佐公能なりき長承二年六月十四日御靈會あり院女院京極殿にて見物したまひ又馬長童部田樂散樂等を御所に召入れて御覽あり同三年六月十四日御靈會に際し大風雨あり加茂川の橋梁落ち第二の神輿川を渡さむとして一町ばかり流下り村閭の河に入りて擔上げたり近衛天皇の久安六年六月六日天皇明日の御輿迎の路を避けむ爲美福門院の八條離宮に行幸したまふ但皇后は

先例に依り宮に留りて避けず高倉天皇の嘉應元年六月十四日祇園御靈會例の如し安元二年六月十四日祇園御靈會なり但諒闇に依り所々の馬長田樂等の事なし治承元年六月の祭禮去年の兵火の爲人家調はず依て祭式の形ばかり行はる同三年六月十四日祇園御靈會の事に依り中宮東宮並土御門亭に行啓あり同四年六月七日御輿迎恒の如し同十四日穢に依て馬長の沙汰なし安徳天皇の壽永元年六月十四日三條東洞院に新造したる棧敷にて後白河院御靈會を見物したまふ馬長は天皇高倉院建禮門院等の御催なりき後鳥羽天皇の文治三年六月十四日御靈會に依り中納言通親泰通兼光宰相通資三位光雅隆房等の諸卿參入す建久七年六月十四日是日梶井宮の力士別願ありて金銀錦繡を以て風流を装ひ指貫平笠を着したる馬長廿餘騎其内少將公信定宣等の馬長の隨身巾を懸け扇燕等を付く後堀河天皇の貞應二年五月十四日後高倉院崩じたまひ式日爲に延引し

七月十一日御輿迎あり同十七日御靈會行はる嘉祿二年六月十三日
天皇御靈會の事に因り四條なる嘉陽門院の御所に行幸したまふ寛
喜三年六月七日御輿迎例の如く行はれたり同月十日乞兒境内に餓
死し其穢の爲に式日延引七月十三日御靈會を行ふ同四年六月六日
大政所焼失し式日延引同月廿一日御輿迎廿八日御靈會を行ふ後嵯
峨天皇の寛元四年御旅所焼亡し御靈會延引後深草天皇の寶治元年
六月七日穢中と雖も先例に因り御輿迎行はる龜山天皇の文永四年
六月十三日御方違の爲天皇三條坊門に行幸したまひ十四日棧敷殿
にて馬長を劔覽したまふ後宇多天皇の建治二年六月十四日御靈會
の駕輿丁三條大宮にて近江前司行清入道の從者と喧嘩し郎從等神
輿を射奉り又其飭を奪ひて火に投す十五日執行圓榮院宣に依り神
輿を本社に入奉りぬ同廿一日行清入道及其一類悉く疫病に罹りて
死す時人其を神罰なりといふ弘安六年正月六日日吉の神輿洛中に

入り十月に至るも猶歸座の色なし祇園祭禮爲に延引十一月廿一日
御輿迎あり同廿八日御靈會を行ふ伏見天皇の正應五年石山の事に
依り山門の大衆蜂起し式日爲に延引十一月七日神輿迎あり同十三
日御靈會を行ふ永仁三年六月十四日御靈會の駕輿丁姉小路東洞院
にて山僧蓮台坊範舜阿闍梨と喧嘩し神輿破損又穢あり顯尊法印奉
行して少將井の神輿を造替ふ依て八月廿五日更に御靈會行はる後
伏見天皇の正安二年五月十三日性算等の事に依り神社の門を閉ぢ
らる式日爲に延引七月十八日御輿迎あり同廿五日御靈會を行ふ
後二條天皇の乾元二年六月六日天皇祇園會御方違の爲萬里小路へ
行幸したまふ奉行頭中將有通なりき花園天皇の延慶二年六月山僧
洪賀等の事に依り西塔一院訴訟し終に神社の門を閉づ是に式日延
引し十二月五日神輿三基日吉の神輿四基と輿に入洛し並陣頭に振
捨てたり其後神輿の改造遷延し九年間祭禮なし文保二年六月十四

日御輿迎あり同廿一日御靈會を行ふ但假神輿を用ゐたり其例是に
 始まる爾來三年間假神輿を以て祭禮を行ふ後醍醐天皇の元亨元年
 十一月十九日御輿迎あり同廿七日御靈會を行ふ是歲新造の神輿を
 用ゐたり嘉曆三年四月十二日山門の訴訟に依り神社門を閉づ式日
 爲に延引し十一月十一日御輿迎あり十八日御靈會を行ふ延元元年
 式日延引十二月廿七日御靈會を行ふ當時馬長は朝廷より催し遣は
 さる然れど亂世中に依り觀覽なし後村上天皇の興國五年江州國衙
 の事に依り神社門を閉づ式日爲に延引し十一月十五日御靈會を行
 ふ正平六年六月七日亂後不穩と雖も御輿迎あり十四日御靈會を行
 ふ同廿年六月十四日御靈會あり是歲笠鷲鉾と久世の舞車とはなか
 りき又諸大名の見物もあらざりき後龜山天皇の天授四年神輿の改
 造成功せざるを以て御輿迎の式なし但鉾のみ修繕を加へ四條東洞
 院に棧敷を構へ足利義滿見物す後小松天皇の應永八年六月七日御

靈會あり大政所參詣して神輿を拜す稱光天皇の應永廿二年六月十
 三日日吉の神輿内裏に入り山僧狼藉御靈會爲に延引す同廿八年六
 月七日祇園會舞車あり將軍管領並見物す同三十二年六月七日御輿
 迎あり十四日御靈會を行ふ將軍義量三條富小路なる細川右京大夫
 入道の亭に入り佳例と爲す後花園天皇の永享五年六月七日御靈會
 あり將軍義教京極治部大輔の第に到り見物す同十一年六月十四日
 御靈會の駕輿丁警固の輩と鬪諍し矢二筋神輿に立てり嘉吉元年六
 月七日御輿迎あり將軍義勝京極の棧敷にて見物す是歲より山鉾等
 の警固の輩兵器を帯びて鬪亂を制す足利義教祇園祭禮の衰へたる
 を憂ひ諸物を調ふ朝廷も亦綸旨を下して諸般の事を理せしむ同三
 年六月七日御靈會あり山鉾以下風流例の如し文安三年山僧訴訟し
 式日爲に延引七月七日渡御祭同十二日還幸あり寶徳元年叡山の訴
 訟の爲に遮られ式日延引して十二月一日神輿三基透廊へ出で七日

に御輿迎あり十四日御靈會を行ふ享徳三年六月十四日御靈會を行ふ種々の舞あり築地の上に棧敷を設け將軍義政夫妻見物す康正二年六月七日山僧の訴訟休まざるが爲終に御輿迎行はれざりき寛正五年六月七日御輿迎に就き將軍義政京極第に到る十四日御靈會を行ふ北島踊加賀舞等あり後土御門天皇の寛正六年六月七日御輿迎あり將軍義政京極第に到り能樂を見物す白拍子加賀女殿中に参り舞を奏す文正元年六月七日御靈會あり將軍義政京極第に到り觀世猿樂等の諸興を見物す應仁元年是歲京師大火の爲祇園會の沙汰なし明應五年二月十三日是より先京師大亂祇園會二十九年歇む是に至り始めて再興すべき旨を達す同六年五月柳を以て神輿に代へ祭禮を行ふべき旨其當否に係る交渉繁雜なりき同九年五月亦同じ六月七日遂に御輿迎あり十四日御靈會を行ふ後柏原天皇の文龜元年同二年等に至り六月七日の御輿迎十四日の御靈會其他山鉾等の風流大

約復古の狀況を呈す同三年六月五日達あり其旨趣權門勢家と雖も祇園會執行に異儀ある者は罪科に處すとたり永正元年同二年等六月七日の御輿迎十四日の御靈會皆無事なりき朝中儀式に怠らず紫宸殿より観覽等あり同三年六月七日御輿迎あり細川父子見物す同八年日吉の祭禮に依り式日爲に延引十二月廿四日に至り山鉾等の調度を社頭に附せらる同九年祭禮無事同十四年六月日吉の祭禮なき爲祇園會延引八月七日雨を衝き祭禮を行ふ同十六年江州の訴訟に依り日吉の神輿動座祇園會の式日爲に延引大永二年左衛門尉三善丹後奉行し祇園會舊例を履む同三年六月祇園會延引十二月十八日に至り祭禮を行ふ同五年六月又延引十一月十七日祇園會あり同六年式日延引六月廿二日御輿迎廿九日還幸後奈良天皇の天文十五年六月十四日御靈會あり將軍義晴及諸大名棧敷を構へて見物す正親町天皇の永祿二年六月七日前日皇居より進られたる鉾を以て渡

御祭を行ふ同十一年六月會延引十月に至り行はる將軍義昭見物す
天正十年五月晦日神輿假屋を出てす多數の力を資るも猶出でず諸
人甚怪む六月二日明智光秀反を謀り織田信長害に遭ふ式日爲に延
引するに至り諸人神輿に感ず是歲十一月七日御輿迎あり十四日御
靈會を行ふ後水尾天皇の元和元年六月七日御輿迎あり徳川家康上
洛の途次是日の入京を憚り膳所城に一泊して翌日京師に入る同九
年六月十二日將軍家光上洛して二條城に入る十四日の祭禮神輿三
基並城の前を渡り將軍城中より見物す寛永五年觸穢に依り祭禮の
沙汰なし明正天皇の寛永八年六月七日の御輿迎十四日の御靈會並
無事同十七年六月七日四條立賣中町に棧敷を設けて東宮御輿迎の
御覽あり十四日御靈會を行ふ東宮又御覽あり東山天皇の寶永五年
三月京師大火是歲祭禮形ばかりを行ふ其後山鉾等漸次整ひ壯觀類
なし改曆以來は七月十日神輿洗の式を行ひ十七日渡御祭を行ふ謂

ゆる御輿迎なり廿四日御輿三基洛中洛外を巡りて本社へ還幸す謂
ゆる御靈會なり廿八日又神輿洗の式を行ふ概して祇園會といひ祇
園祭禮と稱す始勅令に出で後官祭の例となり今は氏子の私祭たり

(祇園社本縁錄) 貞觀十一年天下大疫之時爲寶祚隆業人民安全疫病消除鎮護下部日
長麻呂奉勅六月七日建六十六本之矛 長二丈許 同十四日率洛中男兒及郊外百姓
而送神輿于神泉苑以祭焉是号祇園御靈會爾來每歲六月七日十四日爲恒例矣

(二十二社注式) 祇園社 祭禮 同圓融院天祿元年六月十四日始御靈會自今年行之
(師遠年中行事) 六月 十五日感神院走馬勅樂等事 天延三年始被奉依去年御疱瘡
也 近例十四日稱祇園御靈會貞觀年中雖被下停止人馬宣旨猶參會

(本朝世紀) 長保元年六月十四日乙丑今日祇園天神會也而自去年京中有雜藝者是則
法師形也号世謂无骨實名者 賴信世間交仁安 等者件法師等爲令京中之人見物造
材擬渡彼社頭而如云々件材作法宛如引大嘗會之標仍令聞食左大臣此由驚被下停止
之宣旨隨召仰檢非違使奉此由檢非違使馳向彼無骨所擬追捕之間件無骨法師等在前
問云々逃去已了爰檢非違使空以還向且令申彼社頭無骨材停止之由于時天神大忿怒

自禮盤祝師僧躑躅即付邊下人作託宣云々

(祇園社本縁録) 一條院長保三年六月祭禮例年二十倍モリ

(祇園社記) 長元九年四月十七日後一條院崩御仍六月七日祭禮延引同月廿一日御輿迎同廿六日御靈會被遂行畢

(本朝世紀) 康和五年六月十四日辛酉祇園御靈會也今年始以三條大宮爲列見辻云々先例用堀河也

(祇園社本縁録) 堀河院長治元年六月祭禮供奉渡殊更當年結構セラル是宮々御見物アル故トゾ

(師元年中行事) 六月 十四日祇園御靈會事

(中右記) 永久二年六月七日午時許參内候藏人辨直廬祇園御輿迎之間右衛門陳方近々雜人成市之程自爲止成濫惡之輩相具檢非違使所參内也凡院御鳥羽殿之間常可候内之由有院宣也長承四年五月廿七日院顯頼卿送消息云來月七日祇園可令移少將井給 俗稱御輿迎云々

(中右記) 大治五年六月十五日祇園御靈會也宣命上卿左兵衛督實能使殿上人五位右兵衛佐公能

(公事根源) 六月 祇園御靈會 十四日 この祭の日は禁中はことなる事なし馬長などもよはしつかはさるれども御覽はなし云々

(崇徳院御記) 長承三癸丑年六月十四日丁酉天晴祇園御靈會也院女院於前齋院御所京極殿有御見物馬長童部二十人餘田樂散樂等召入御所御覽云々

(長秋記) 長承三年六月十四日壬辰御靈渡御間大風雨後聞鴨河橋破大政所第三神輿渡川一町許渡下村間人入河荷上之云々入夜詣祇園然而依鴻水不能渡川仍於西岸遙拜侍宗隆水練者也仍取幣渡川付大別當

(台記) 久安六年六月六日辛亥傳聞天子幸美福門院八條離宮以避明日祇園御輿迎之路皇后留宮不避依先例也

(兵範記) 嘉應元年六月十三日戊戌殿下令參内了御宿侍云々且是明日祇園御靈會此三條大路可便之故云々十四日己亥祇園御靈會如例

(愚昧記) 安元三年六月十四日壬午今日祇園御靈會也無所々馬長田樂等事依諒也院參人々予前治部卿 光隆 左兵衛督成範右兵衛督 頼盛 修理大夫 信隆 三位 隆輔 左京大輔 修範 右新宰相中將 家宗 參入

●編者云安元三年とあるは二年の誤なり

(祇園社木縁縁) 高倉院治承元年六月去年安元二年ノ兵火以來京都ノ人家モ不調ザ
レトモ六月祭禮有其カマバカリ執行ルベシト仰下サレケレバ其日ハ神敬ノ祭ノカ
マバカリナリ

(山槐記) 治承三年六月十三日己亥今夜有行幸中宮并東宮行啓皆令渡土御門亭來十
四日祇園御靈會云々

(玉海) 治承三年六月七日甲午依祇園御興迎晝之間爲精進是例事也

(玉海) 四年六月七日戊子今日參女御御方祇園御興迎如恒雖天下穢本社沙汰先例不
憚云々

(明月記) 治承四年六月十四日天晴依穢無馬長沙汰

(吉記) 壽永元年六月十四日癸丑今日祇園御靈會也院有御見物 三條東洞院被漸造
御棧敷 不被憚時勢歎馬長內院建禮門院三方相並三十餘騎云々自兼日雖被相催而
々難澁年弊人窮之故歎

(玉海) 文治三年丁未六月十四日甲申此日祇園御靈會也參入之公卿 中納言通親卿

泰通卿 兼光卿 宰相通資卿 三位光雅卿 隆房卿

(明月記) 建久七年六月十四日於北大路棧敷渡之云々以金銀錦繡施風流皆悉着指貫

平笠馬長廿餘騎其內公信少將馬長隨身懸緒脛巾定宣少將付襟々房亦有付燕

(祇園社記) 貞應二年五月十四日後高倉院崩御仍天下諒闇間式日延引同年七月十一
日御興迎同十七日御靈會被遂行畢

(明月記) 嘉祿二年六月十三日今夜依祇園御靈會行幸四條壬生嘉陽院御所

(世々樞覽) 寬喜三年六月七日祇園入洛如常而十日社頭有餓死者仍御靈會延引云々

(祇園社記) 寬喜三年六月七日御興迎如式日而於十四日□□於常行堂非人死去之
間依而觸穢式日延引七月十三日被遂行御靈會

(祇園社記) 寬喜四年六月六日大政所燒失候間式日延引六月廿一日御興迎同廿八日
被遂行御靈會畢

(百練抄十五) 寬元四年六月七日甲午云々祇園御興迎延引依旅所燒亡也

(百練抄十六) 寶治元年六月七日戊子祇園御興迎也雖爲穢中依有先例也

(吉續記) 文永四年六月十三日雨下今日爲御方違行幸三條坊門殿云々上皇於三條坊
門殿棧敷殿有御見物云々十四日雨下參內 三條坊門殿 馬長於棧敷殿被御覽云々

(世々樞覽) 建治二年六月十四日御靈會之間三條大宮篝屋狼藉事出來仍神興之傍並
正體等皆以取破入篝屋於篝屋者悉壞燒之又神興振入篝屋□祭禮愁而依院宣執行圓

榮法限及曉更奉入本社

(祇園社記) 社家條令記錄曰建治二年六月十四日御靈會之時三條大宮等前當社神輿駕輿丁近江前司行清入道所從引出喧嘩之處即行清郎從等奉射神輿於簾之間奉振三社神輿於行清齋屋上三條大宮同十五日卯日等神輿三入本社同日十四日丑刻行清入道勞出疫病同廿一日一類等悉以疫病勞死了誠神罰也

(祇園社記) 弘安六年正月六日日吉神輿入洛至同十月御座之間式日神事延引仍同十一月廿一日御輿迎同廿八日被遂行御靈會事

(祇園社記) 正應五年依石山事自山門降起仍式日御靈會延引同十一月七日御輿迎同十三日御靈會被遂行雖可爲十四日依爲公家之御得日被遂行

(祇園社記) 永仁三年六月七日御輿迎無相違之處同十四日御靈會之時大政所二基御輿無相違還御之處婆利女神輿於柳小路東洞院駕輿丁與山僧蓮臺坊範舜阿闍梨引出喧嘩神輿少將井破損穢氣之間御靈會延引神輿婆利女造替奉行顯尊法印後八月廿五日被遂行御靈會畢

(祇園社記) 正安元年六月七日御輿迎無爲之處同九日自山門依斷所事令閉門之間雖令抑留御靈會被下嚴密之院宣於座主并三門跡之間十四日御靈會無相違被遂行

(祇園社記) 正安三年五月十三日依性算事自山門令閉門當社之間六月七日御輿迎御靈會式日延引依同年七月十八日御輿迎同廿五日御靈會被遂行

(公茂公記) 乾元二年六月六日壬辰發今夕行幸萬里小路殿爲祇園會御方違也予依先日催申領狀奉行頭中將有通朝臣也可爲步儀云々

(祇園社記) 延慶二年六月七日御輿迎延引依山僧洪賀等事西塔一院訴訟當社閉門之間延引即同年七月廿八日日吉神輿三基八客十并山神輿入洛祇園林假屋先御座即當社三社同御座同日丑刻日吉并當社神輿等入御當社又重十二月五日日吉殘四基神輿入洛即日吉七社并當社三基等神輿奉振捨陣頭之後造替還々之間自延慶三年至于文保元年首尾九九年祭禮無之處後宇多院御代文保二年六月十四日御輿迎同廿一日御靈會但假輿也 以本造替未作神輿爲假輿 假輿奉行刑部卿當春僧都也 座主芥院覺雲二品親王別當良雲法印執行教晴 是假輿於當社者初例也自文保二年至于元應二年以假輿被遂行祭禮畢

(祇園社記) 元亨元年十一月十九日御輿迎 以今度本式造替神輿御行 同廿七日御靈會被遂行 旅所九日御座□今度初例歟 其謂者廿六日可遂行御靈會之處依山門訴訟令閉門當社之處及嚴密御沙汰被下院宣於座主之間以座主御方者并寺家下

等同廿五日被開閉門之處當社馬上事未治定之間廿六日□延引畢廿七日馬上事治定同日子刻被遂行御靈會畢今年祭禮式日延引者自文保二年元應二每年以假與被遂行祭禮之間依無相違時日長吏附喜法印訴訟申被終造替之功之間式日令延引畢依十一月自作所當春僧都許大宮八大王子神與奉獻社頭畢婆利女神與者被懸波々伯部保顯令造進畢

〔祇園社記〕 嘉曆三年六月七日御與迎十四日御靈會延引其謂者四月十二日依山門訴訟當社閉門仍執行顯詮六月六七日令申沙汰當社祭禮可遂行之由雖被下嚴密論旨於座主宮等山門依申子細式日延引七日著職掌人忠執行雖置社頭八日曉天空悉退出畢十四日重今日可為御與迎之由雖被山門□申子細仍延引又同年十一月八日當社閉門開之仍今日神與奉出拜殿十一日御與迎 酉刻 大政所神主代沙汰外下男少將井神主不□雖然神與奉出之但吉繼孫於路次令參會珍事等也十八日御靈會十九日六月會卅日馬上渡之

〔園大曆〕 建武三年十一月廿八日祇園御靈式日延引十二月廿七日被行

●編者云建武三年は延元元年丙子なり

〔建武年中行事〕 祇園之會禁中コトナル事ナシ馬長モヨホシツカハサルレドモ御覽

ハナシ

〔祇園社執行日記〕 康永二年十一月八日今日御與迎也依江州淺井郡國衙分事閉門之間去六月式日延引□月十三日閉門祭禮事仍社家奏聞之處被尋先例於官被定下日次今日御與迎也來十五日可為祭禮云々

●編者云康永二年は後村上天皇の興國四年癸未なり

〔園大曆〕 觀應二年六月七日今日祇園神與迎依山門神與事不定之由後定誓固等如例十四日祇園祭禮如例

●編者云觀應二年は後村上天皇の正平六年辛卯なり

〔故實一端〕 師茂記曰貞治四年六月十四日今日祇園御靈會如例作山一兩有之云々今年笠鷲鉾無之云々御行酉一點無為神妙云々久世舞車無之大名不見物云々

●編者云貞治四年は後村上天皇の正平廿年乙巳なり

〔後愚昧記〕 永和四年六月七日今日祇園御與迎也而山門神與造替未事終之間彼社祇園 神與同不出來如此間年々無御與迎今日又同前也然而於鉾者繕構也大樹掛棧敷見物之件棧敷賀州守護富樫介經營依大樹命也云々大和猿樂兒童 稱觀世之猿樂法師子也 被召加大樹棧敷見物之

●編者云永和四年は後龜山天皇の天授四年戊午なり

(康富記) 應永八年六月七日乙丑今日祇園祭禮也大政所參詣拜神與今日無定只爰小
鉾有之依無室町殿御出也

(祇園社本縁録) 稱光院應永廿二年今年六月十四日祭禮延引ス是ハ昨日日吉神與ヲ
内裏ニ振奉故ニ京都騒動殊ニ當社騒ギケル故也

(花營三代記) 應永廿八年辛丑六月七日有祇園會舞車 一車作事 御所へ參ル七番
ウマフ同自女中五重色々被下十四日御所様御臺様御方御所様爲祇園會御見物管領

御成有 同三十二年乙巳六月七日祇園祭禮十四日祇園祭禮神幸還幸御所様同臺細
川右京大夫入道亭御棧敷へ成佳例也三條富小路也

(管見記) 永享五年六月七日今日祇園御盛會也室町殿於京極治部大輔許令見物給云
々毎年儀也

(觀音寺相國記) 永享十一年六月十四日祇園祭駕與丁與警固輩喧嘩狼藉出來矢二筋
立神與云々所驚也

(建内記) 嘉吉元年六月七日壬申祇園御與迎也室町殿於京極御棧敷御見物也自當年
鉾笠等警固□□兵具只可着烏帽子單物上下被定仰了爲制鬪諍左可然事也

(祇園社本縁録) 後花園院嘉吉元年六月將軍義教祭禮之衰タル儀式トモナ興シ中絶
シタル役人モ皆出サシメ其外鉾造山等新ニ作出ス禁裏ヨリ萬難公事免許セラルベ
キ繪旨玉ハリ神事怠慢アルベカラズトナリ小舍人雜色ニハ甲冑帶セシメ所々大神
人同甲冑弓箭兵器ヲ帶シテ前駆ス今日將軍祭禮見物アリ當年ヨリ祭禮又美麗ニナ
ルナリ小舍人雜色四人也四人ニ二人宛ツキテ八人アリ合十二人ナリ 十四日共ニ
同事ナリ

(康富記) 嘉吉三年六月七日祇園祭禮也神幸并鉾山已下風渡如例渡四條大路者也

(祇園社記) 社家條々記録

去七日祭禮時節喧嘩事否可被糺明之上者可及祭禮違亂旨可被相待專當官仕以下候
由也仍執達如件

文安三年六月十四日

永 祥 判

祇園社執行御房

(祇園社記) 社家條々記録 文安三年 一六月之御祭禮依山訴御裝束山上へ押留之
間令延引六月ニ御裝束如本御下也則せんはらい取行レテ七月七日ニ御旅所へ御出
アリ同十二日ニ還幸アリ

(康富記) 寶徳元年十二月一日丙子是日祇園神輿三基全出透廊給來七日可有御輿迎
十四日可有祭禮故也云々去六月祭禮依日吉神輿動座山門閉籠事等爲本寺支申之間
令延引了云々七日壬午祇園御輿迎也去六月依山門訴訟令延引者也如例三基令出御
旅所給鉾山已下風流如先々流四條大路云々十四日己丑是日祇園祭禮也神幸如例風
流山鉾被渡三條大路云々

●編者云爲木寺支申之間云々とあるは感神院を延曆寺の末寺なりと見たる謬見なり
感神院の別當と觀慶寺の別當と兼務にして其觀慶寺が延曆寺に隸屬したるを以て
斯る誤解は出來しなり僧徒が私權を恣にせし當時の形勢殆感神院を末寺視したり
●編者云流四條大路とある流は渡の誤字なり

(成氏年中行事) 亨徳三年甲戌六月十四日祇園會之船共參種々舞物有之御築地上被
掛御棧敷公方様御籠中様有御見物也

(師郷記) 康正二年六月七日乙巳今日祇園御輿迎無之依山訴未休也

(季瓊日録) 寬正五年六月七日祇園會就京極第御成同十四日祇園祭禮北畠跳才歌舞
加賀舞參御所舊例也

(年中定例記) 七日祇園祭京極亭御成能アリ十四日祇園祭カト申白拍子殿中へ參

御折紙下サレ候

(應仁前記) 當時公方家御規之次第 寬正六年乙酉ノ頃 六月七日 御成京極祇
園會

(嵯川親元日記) 寬正六年乙酉六月七日癸未天晴云々御成 御供衆兩番悉 京極祇
園會祭禮已後能在之觀世スワウマキアリ還幸ニ亭主ヨリ走衆マイル貴殿ノ御供親
元同十四日庚寅天晴曇晚雨祇園會駕力加々車公方へ參

(貞丈雜記三) 加賀女と云は遊女なり加賀國より出るなるべし殿中申次記云白拍子
御禮申上歌之事貞仍 伊勢下總守 從殿中貞宗へ 伊勢守 被尋申處に御禮申上
事先規無之自然御陣中などへは致參上候歌殿中へ祇候事努々不可在之加賀女は殿
中へも參る自然可在之歌之由御返事在之云々條々聞書に加賀ふしなどは今は聞た
る人もまれに候べしとあるは加賀女のうたひたる歌のふしを云なるべし殿中日々
記に六月十四日祇園會カ事公方へ參るとあるも加賀女の事にて車といふは女の
名なるべし書札雜聞書云公方へしらびやうしは不參候カ女と申遊女參候加賀ふ
しなどにてはやり候云々年中定例記六月の條に祇園會カと申白拍子殿中へ參御
折紙被下候

(齋藤親基日記) 寛正六年乙酉八月 一今度御成祇園會御成延引之間非臨時儀也

(齋藤親基日記) 文正元年六月七日祇園會御成如先々

(蔭涼軒日録) 文正元年六月七日祇園會於京極方御成云々天陰欲雨八鼓刻京極第御成御見物並觀世申樂還御互九鼓也京極依貧乏御成雖云閣之所司代多賀豐前守同弟治良左衛門爲兄弟營之凡爲人之臣量之忠義之厚不亦龜鑑乎

(祇園社本縁録) 應仁元年六月八日京大燒祭禮不及沙汰

(宣胤卿記) 文明十三年六月七日晴今日祇園御管會亂後不及沙汰云々

(親長卿記) 文明十七年六月十四日祇園會不及被行亂後如此依不付物忌

(祇園社記) 祇園會事及三十餘年退轉候條相談十穀聖縁令勸進所々可造主神興之段被成御達書於□方大政所神主□千代然早令存知之旨可被守祭禮再興由被仰出候也仍執達如件

明應五壬二月十三日

種 貞 判

當社執行御房

(祇園社記) 祇園會之事以柳准神興被遂其節□例有之云々然者於當年者先以其旨可被執行之由被仰出候也仍執達如件

明應六五月十六日

清 房 判
元 行 判

當社執行御房

(八坂神社古文書) 當社祭禮事以柳准神興可執行之由被仰出候御再興之儀誠以千秋萬歲珍重候仍勘記録候處以柳執行申候儀於當社者無其例候以此旨御披露所仰候

五月廿一日

玉 壽 雜 學 判

飯尾加賀守殿

●編者云此古文書は勢多判官の筆にして五月廿一日は後土御門天皇の明應六年丁巳五月廿一日なり

(祇園社記) 祇園會之事近年退轉候條且追測神慮者歟右不可然候所詮可爲御祈禱專一候間於當年者先以柳可執行者被成奉書被令存知其段不移時日相觸氏子并諸役者遂神事不爲之節由被仰出候也仍執達如件

明應九五月十八日

清 房
元 行

當社執行御房

〔祇園社記〕祇園會之事於當年者先以神可被執行之段先度被成奉書候へ共每年令甚略可專神事旨重々相觸諸役者可被遂其節若有及異儀之輩者隨□□可被處嚴科被仰出候也仍執達如件

明應九五月卅日

清房
元行

當社執行御房

〔祇園社記〕祇園會之事以御神被執行之義無先例之段難□申入候神事退轉不可然之旨雖為非例可被遂其節之旨度々被仰之上者縱日吉祭禮等雖有遲雖於當社之義嚴密加下知可被專神事若有難澁族者一段可有御成敗之由被仰出候也依而執達如件

明應九六月朔日

清房
元行

當社執行御房

〔祇園社記〕明後七日祭禮之事任上意嚴重被申付候處神興□透廊御出之義就一兩日延引為官仕可及訴訟候哉言語道斷次第一本□□錢等再興以來隨不相調候奉應御成敗各隨諸役致神忠之所至當年官仕等申事不及覺悟候以此旨堅被申付候可被遂神事

無為節候萬一猶以及異儀候へ一段可被處其咎可被執行候可為越度候可被得貴意候恐々謹言

六月五日

清房

祇園社執行御房

〔忠富王記〕十年六月七日祇園會內祭如例年十四日祇園會山笠敷々在之云々

〔拾芥記〕文龜二年壬戌六月七日祇園天晴一亂以後初云々同十四日祇園還幸

〔祇園社記〕祇園會之事再興之處限大舍人方任雅意不隨其儀候條言語道斷次第也為去明應九年以來失隨分貳百貫文分嚴密令社納之可遂神事無為之節旨堅可加下知□座中萬一有及異儀之輩者不謂權門勢家之御官可被處罪科之段被仰付□□訖令被存知之由被仰出候也仍而執達如件

文龜三六月五日

清房
元行

當社執行

〔三水記〕永正元年六月七日當番伺候今日為祇園會從紫宸殿祭禮御見物有之已後於

清冷殿三獻參之男者伯侍從予兩人斗也小歌等有之云々同二年六月七日今日祇園會也於紫宸殿主上御見物也十四日於常御所二獻參之爲祇園會御祝

●編者云清冷殿とあるは清涼殿の誤寫なり

(拾芥記) 永正三年丙寅六月七日天晴祇園會也細川父子見物云々

(祇園社記) 祇園之事依日吉祭禮延引に今令遅々既及月迫之條地下人等已山鉾難調之旨難申間已後失墮被付當社畢不可爲向後例段可被存知候由被仰出候也依而執達如件

永正八十二月廿四日

貞 運

長 俊

當社執行御房

(拾芥記) 永正九年壬申六月七日十四日祇園祭禮也同十四年丁丑六月七日可有祇園會之處依無山王祭延引也

(宣胤卿記) 永正十四年六月七日今日祇園會延引依無日吉祭也十四日祇園會延引同前八月七日終日雨今日祇園會依雨鉾山等覆雨皮云々十四日祇園會也式月延引事見前十六年六月七日祇園會延引依無日吉祭也 爲江州訴訟神輿助座

(祇園社本緣錄) 大永二年六月六日當年ヨリ舊例ノ如ク可執行トテ左衛門尉三善丹後守平朝臣奉行ニテ駕輿丁鉾造山等之役人ニ御下知狀ヲ賜フ

(三水記) 大永二年六月七日祇園會如例年也十四日午後祇園會於臺華院殿令見物三條相國同道也裏頭之體密々議也廿七日參伏見殿祇園會御見物令供奉梶井宮竹内殿等御誘引也於等持寺之内密々御見物也南門之西坤角方被構御棧敷從鹿苑院被仰付云々今日祇園會之事武家爲御見物令沙汰式日依御不例也京極申沙汰也爲如例云々御棧敷八間也坤角方被相構山鉾等等持寺前東行御所廣前南行渡之七日鉾山等渡於御所一獻云々數刻後十四日山々又渡也此間雨下無興之體也武家今日早朝渡御三條御所云々

(三水記) 大永三年十二月十八日祇園會也山王祭會有之山王祭依無之六月延引云々同廿一日今日又祇園會有之同五年閏十一月十七日祇園會今日有之山王祭依延引六月無之同六年六月廿二日祇園會今日有祭禮 山王祭廿日有之 同廿九日祇園會如例還幸也

(祇園社本緣錄) 大永六年六月七日祭禮延引ス是ハ大永六年四月七日後柏原帝崩御ナル故ニ山王會延引ス六月廿日申日ナラケレバ行ハル故ニ祇園會モ延引シテ七月

二日ニ行ハル世俗ニ山王會延引スレバ祇園會モ延引ストハ此時ノ事也

(三水記) 大永八年八月七日祇園會延引今日有也云々十四日祇園會今日還幸如恒

(祇園社本縁録) 後奈良院天文十五年六月十四日將軍義植公 或義晴ト云説有可考

四條大宮町家ニ棧敷カマヘテ祭禮御見物有諸大名皆々棧敷ヲ搆テ見物アリ

(祇園社本縁録) 正親町院永祿二年六月六日禁裏ヨリ餅ヲ參セラレ七日ノ祭禮ニ渡申サル同十一年當年ハ六月祭禮延引シテ十月ニ被行之將軍義昭御見物アリ

(祇園社本縁録) 天正十年六月祭禮延引ス五月晦日例年ノ如ク神興ヲ出奉ラムズル

ニ神興假屋ヲ出玉ハズ又人數少ナキ故ニヤト猶大勢ヲ加ヘケレドモ兎角出玉ハズ漸程アリテ出シ奉リケリ然ニ六月二日左大臣平信長公爲明智日向守光秀被害玉ヒ

京都大ニ亂テ祭禮ノ沙汰ニ及ズ晦日ノ神異諸人大感シテ飄舌ス其年世間ノ事シツ

マリテ十一月七日十四日祭禮アリ上下京ノ者ノ云ケルハ祇園會ハ先例ヲ專トス例

年齡ハ瓜ニテナクハ客ノ饗ニアラズト戲レケレバ中京ノ亭主方ヨリ麻ノ帷子ヲ着セヌ客ハ饗セシト云ケルト也

(祇園社本縁録) 後水尾院元和元年六月六日大相國家康公關東ヨリ御上洛今日江州

膳所ニ御着アリ明七日御入京アルベキナ明日祇園祭禮タルニヨリテ神事ノサハリ

タルベシトテ膳所ノ御城ニ御逗留アリテ八日ニ御入京アリケリ云々同九年六月十

二日大將軍家光公御上洛十四日ノ祭禮神興三基共ニ二條城ノ前ヲ渡御シ奉ル

(梵舜日記) 寛永五年六月十四日晴祇園會神事祭禮如例年神幸也觸穢無沙汰儀也同

八年六月七日庚戌雨降祇園天王御神事午刻雨晴天下無事御神幸也同十四日丁巳晴

祇園牛頭天王還幸無事之御神事也備洗米御酒□新念也

(祇園社本縁録) 寛永十七年六月七日四條立賣中町北願乾淨哲家ニ御棧敷ヲ設ケ東

宮 後光明院スガノミヤト申 祇園會御覽同十四日誓願寺安樂菴ノ閣ニ御棧敷ヲ

設ケ東宮祭禮御覽

(皇年代私記) 後光明院諱紹仁後水尾院第四皇子母東福門院實母壬生院寛永十年三

月十二日降誕(參考)

(都行脚五) 今宮神興祓ひも遠慮と見ゆ御出も淋く御旅のうちみせもの茶店一つもなし御神事練物もなし祇園會の涼みばんど町西石垣に火ともさず川のうち涼床すくなく賑もなし七日の御出はさのみかはらず十四日の御迎山類焼の町其外も遠慮と見ゆて莊物幕など鹿相なるを用ひたると見ゆ分て橋辨慶山木綿一重の幕にて人形衣裳も見苦く祭禮の規式は例にかはらず寶永大火の年の事を云ふ

(倭漢合運指掌圖) 寶永五戊子三月八日自午下刻京都大火事自油小路通姉小路下町西側三軒目出火從坤風烈吹來次第燒上禁裏檼炎上其外七御所公家屋敷九十四軒從下鴨火飛河合社炎上并在家四十軒餘燒又復風變次第次第燒下翌九日未下刻迄燒油小路三條火止方角油小路九太町迄燒自其又直達上長者町通鳥丸燒行內裏之內寺町通今出川三町北迄從其燒下寺町通三條迄不殘東川限燒寺町二條下東側殘自西側不殘燒但二條下三町目西側許一町殘段々四條上町迄燒但四條通火不出錦小路通東洞院西町迄兩側共燒蛸藥師通新町迄六角通西洞院迄三條通油小路燒留大凡京町數四百十七町家數二萬三百五十一軒寺數五十五ヶ寺社數六ヶ所云々(參考)

八坂誌卷十終

八坂誌卷十一

神輿洗の事

五月晦日と六月十八日との兩度神輿を洗ふ晦日の朝諸人社頭に詣で、杉の小枝を受け家に歸りて祓式を行ふ更に詣で、神輿三基を神輿舎より出し南の樓門を出で祇園町を西へ通り加茂河へ昇至り水を濯ぎて洗清め元の道を昇戻りて西の樓門より入り拜殿の四周を三度昇廻りて其まゝ拜殿に据ゑ此夜飭具を附く中間御座の神輿は六角なり鏡に懸くること十八面東間御座の神輿は四角なり鏡を懸くること廿四面西間御座の神輿は八角なり鏡を懸くること廿四面各上に前後二面づゝの鏡を懸く鏡の數總て七十二面上は鳳凰と鷓鴣と珠とを着け水引羅毛鈴瓔珞雲豆等を以て飾り國路の太刀各一振を相添ふ昔は時として或は一基を洗ひて二基を洗はざること

あり或は二基を洗ひて一基を洗はざることもあり今は中間御座の神輿を洗ふ迎送の男女昔は挑灯を竿に着け異装して前後に離子を行ひたり改曆以後は七月十日と同日二十九日との兩日に行ふこととなり行列も亦改まれり先高張法被二人二行次に清々講社の幹事次に高張法被二人二行次に氏子各組清々講社員若干人二行次に宮本祇神組の提灯法被二人次に清々講社宮本組員若干人二行次に炬火着袴二人二行次に神輿與丁清々講社三若組次に炬火着袴二人二行次に大炬火着袴一人次に神職二人從者二人二行次に押次に高張法被二人二行次に日供講社員次に傘籠次に押等なり此式兩日とも午後九時より行はる

(諸國圖會年中行事大成三) 五月 晦日祇園神輿洗 洛東にあり 今夜神輿三基を神輿舎より出して少將井の神輿を四條繩手の辻に据ゑ水を灌ぐ事は六月七日の條にしるす 今夜生土子の者迎挑灯を捧て本社に詣づる事おびたしく其體挑灯一

雙を竿に付其上に幣額を付尤も美麗を盡す今日未刻ばかり祇園町同新地遊女屋より練り物を出す其體標子の壯麗なるをわらみ月代を剃しめて男の姿としあるひは角力取の形にやつし又は高貴の官女下賤の厨女傅兒或は牙婆海士乙女漁人農夫の類ひ山伏虚無僧見ぬ唐土の風俗まで真似粧ひ先離子後離子の曲調と年毎に新なり其役々は唱女子保兒幫間など歳々の時勢に隨て風流の扮粧し先祇園新地富永町の東にて揃ひそれより西の方繩手通に出て祇園町を東へ敷の下を南へ通り石鳥居を過て南の門より本社へ入西の門を出て北へ新橋を西へ繩手より末吉町を東へ通りて元の所にてみなく己が家に販るこれを見むとて其めぐる家々には客を饗し寸地も空所なく群集す是によりて非常を制せられんが爲め辻々の固をいたさる東山のにぎはひこれより大いなるはなし

(諸國圖會年中行事大成四) 六月 十四日祇園會云々十八日空輿を四條繩手の辻にて水をかくる事五月晦日に同じく神輿洗といふ挑灯炬火おびたしくこれに従ふ爾して後神輿を神輿舎に入る祭式に甲冑を帶する例なり是を見座家といふ洛中に散在して住す古來より雜職衆に隨身す

(藝苑日涉七) 五月晦日及六月十八日在鴨河四條橋東洗淨神輿謂之御輿洗是日也鴨

東茶坊娼戸結彩繖錢飲翠裘香演雜劇戲文故事其人物則皆扮娼妓爲男裝謂之泥黎毛
濃又纏結爲棚謂之治台樂則有三絃胡琴提鼓鉦鼓謂之離子 讀云發藥式 珠翠錦綺
香紉白紵盤裝濃抹觀者每噴々要不過勾引無賴子弟以爲奇貨耳

(祇園御鎮座本記) 五月 三十日 神興洗神事之事 湯桶杓布六尺社務ヨリ宮仕へ
渡古例也

(珍珠船) 男女參詣各受杉葉而被禱災是稱茅被入夜神興洗凡其式云々出神興自南門
歷石華表過松林自祇園町鴨水邊古灌河水於神興而洗之故稱神興洗今雖無其儀依舊
而稱之然後再自祇園町入西樓門□二基安拜殿神興其供四條芝居役者竿頭張挑灯外
面各記名前高上之意氣揚々然興往來其行也如飛祇園町家々每高張挑灯諸人群集而
不滿寸地又六月十四日祭禮終後神興三基有社頭同十八日夜二基神興直入神興舍少
將并神興如今夜之式云々

(神事記) 神興洗朝ノ間諸人參詣シテ杉葉ノ守札ヲ受テ飯ル未刻頃ヨリ祇園町遼物
宮川町細手通ヨリモ例年出ル町々氏子ノ作モノ行燈ヲ持到ル諸人群集セリ夜ニ入
神興三基ヲ舍ヨリ出シ稻田姬八王子ノ二基ハ拜殿ニ置キ牛頭天王ノ一基之ヲ昇ク
石ノ鳥居ヨリ中路ヲ下リ八軒町ヨリ祇園町へ出西へ行氏子或ハ諸願ノ人々又ハ芝

居ノ役者ヨリ提灯數多持來ル大路ニテ神興ヲ洗フ式アリ各手桶ニテ水ヲ洒グ是神
興洗ノ儀ナリ夫ヨリ神興ヲ昇テ飯リ西門ヨリ入小宮ノ前ヲ通リ本殿ヲ神前へ出拜
殿ヲ三廻リシテ拜殿ニ納ム夜中ニ傍リ置是中古ノ次第也古ハ神興ヲ中路ヨリ四條
河邊ニ昇出シ水ヲ洒ギ飯ヒ清ム故ニ三條ノ下ヨリ松原ノ上迄ヲ御飯川トモ又宮川
トモ云六月十八日同之

(祇園社記) 安永頃ヨリ例スル處自宮仕松明三本出ス是麥藁ニテ火ヲ付社代へ案内
ス社代ヨリ松明一本出シテ西門ヨリ入至神興舍自付雜色拜殿ノ東ニ座ス八王子少
將井トノ神興ヲ出シ各拜殿ヲ三廻リシテ爰ニ納ム也次ニ牛頭天王ノ神興ヲ出シ神
樂所ノ後ヲ南大門へ出ル其例宮仕松明神興社代片羽屋雜色也石鳥居ヨリ神幸道八
軒町ヲ祇園町細手辻ニ到神興居水ヲ洒グ宮仕差圖シテ西門ヨリ入拜殿ヲ三廻シテ
爰ニ納ム

(祇園御鎮座本記) 神興傍付之事 三十日ニ寶藏ヨリ出シ今夜拜殿ニテ傍ル其具
御鏡 牛頭天王神興六角ニシテ一所三面宛合十八面上掛前後二面八王子四角ニシ
テ一所二行六面宛合廿四面少將井八角ニシテ一所三面宛合廿四面上掛二面總合七
十二面 天蓋 寛政九年己年ヨリ止 水引 羅毛 鈴 太刀 牛頭天王至及卷切

先三尺三寸八王子至及卷切先二尺九寸稻田姬至及卷切先二尺九寸銘出羽大掾藤原
國路三振トモ同シ 御裝束 卯鳥ニ玉 乙鳥 轆 横轆 嚙絡 雲豆 御袴幕張
等也 牛頭天王神輿六角ニシテ在鳳凰八王子八角ニシテ鳳凰アリ稻田姬四角ニシ
テ在玉 稻田姬八角ニシテ在鳳凰誤ナラムト云々

八坂誌卷十一終

八坂誌卷十二

御旅所の事

高辻東洞院に秦助正といふ人あり圓融天皇の天延二年五月晦日の
夜助正が夢に廿日の後八坂大神居宅に神幸あるべしと告げらる同
じ時助正が宅の後園なる塚塚より蜘蛛糸を引きて遠く八坂の社殿
に至る爰に政所の所司怪みて奏聞せしかば助正を神主と爲し又其
居宅を以て御旅所と定むべき由の宣旨下る是歲より始めて年々其
地に神幸あり御旅所元壬生の邊にあり後烏丸五條の北謂ゆる大政
所の地にあり大政所は豊臣秀吉が母の住めるを以て名あり素戔鳴
尊の神輿の大政所の地に渡御あるに因り世人竟に素戔鳴尊を大政
所と稱す御旅所二處あり後拾遺集の作者少將尼二條烏丸に住めり
其邸内に冷泉の井あり世人其井を少將井と號す疫病流行の甚しか

りし年上京の人権稲田媛命の神輿を分ちて上京に迎へ彼少將井の上
 上に置き御靈會を行ふ終に例と爲りて其地を御旅所と定む權稲田
 媛命を世人の少將井と稱するは其縁起なり後嵯峨天皇の寛元四年
 六月六日火四條坊門より起りて五條坊門まで延焼し御旅所焼亡後
 小松天皇の元中二年十二月高辻の北烏丸の東なる御旅所の敷地一
 保四町を寶壽院に附せらる應永十七年六月大政所の御旅所に係る
 禁制三項の規定あり其一相撲を興行する事其二行脚僧經聖等の輩
 を社中に宿らしむる事其三竹木を剪取る事右堅く停止せしめ若違
 犯する者あらば罪科に處すと成り同廿八年十二月二日大政所の御
 旅所に勸進田樂を行ひ將軍義持六十三間の棧敷を設け阿波守島山
 次郎信濃守島山持清中務少輔大館五郎伊勢守貞慶下總守貞房等の
 五騎を從へて相臨む後花園天皇の永享六年二月十一日洛中の人家
 一萬餘火け御旅所焼亡後奈良天皇の天文五年七月十二日法華衆徒

の亂あり大政所の御旅所其兵火に罹りて炎上正親町天皇の天正年
 中豊臣秀吉二處の御旅所を四條京極に移す四條通の兩側に二字の
 社殿あり各西向北の社は素戔鳴尊と五男三女の大神との御旅所に
 して南の社は權稲田媛命の御旅所なり今其所在地を御旅町といふ

(祇園社本縁録) 人皇六十四代圓融院御宇天延二年五月晦日靈夢ノ告アリ當社ノ神

高辻東洞院奏助正居宅ニ廿ケ日ノ後神幸アルベシトノ神託アリ

今六月祭禮ニ長六尺幅七寸ノ板ニ文字百二十一宇書テ錦ヲ以テ包マルハ此神託ノ
 由來ヲ書タル札ナリ常ハ御旅所ニ納置ケリ當時祭禮ニ持トコロノ札ノ外ニ又一枚
 御旅所ノ内陣ニ札アリ六月祭禮ニ七日ヨリ御旅所へ神輿ヲ渡御セシムルハ此年ヨ
 リ起レリ御旅所御守助正ガ子孫十代許アリテ其後絶マリ六月祭禮御旅所與利出御
 玉文 板ニ書以錦包之名目ニ謂於多麻也

天延二年

感神院政所

六月七日

圓融院御宇天延二年五月下旬之頃以先祖助正居宅高辻東洞院爲御旅
 所可有神幸之由有御神託之上後園有塚塚蛛絲引延及當社神政所司等
 怪之尋到通助正之宅畢助正感夢去七箇日可有鎮座之由所司等經奏聞
 之處以助正爲神主以居宅可御旅所之致宣旨

(御旅所社家記) 圓融院御宇助正者住高辻北東洞院西天延二年五月下旬夢助正宅可有神幸云々翌朝見後園有界塚自其塚蜘蛛絲曳至祇園社因妻事朝詔六月七日伴所爲旅所

(雍州府志二) 天延二年五月下旬有神託鎮座東洞院高辻助正宅是祭禮之始也云々旅所始在壬生邊近世烏丸五條北今謂大政所之地也於今有小社豐臣秀吉公令移三社旅所於四條京極今處祭寬喜三年始用六月七日所記祭禮次第儀式之版後圓融院之宸翰而祭日納此板於錦袋黃衣禰宜携之從行

(祇園社本緣錄) 人皇六十七代三條院長和二年神託ニユリテ婆利采女神與ヲ大炊御門冷泉ノ間東洞院烏丸ノ間少將井ノ處ヲ御旅所トス 此時ユリ三座神與ノ内一基ヲ東洞院ヨリ二條ノ上ヘ渡シ奉リ二基ノ神與ハ烏丸高辻ノ御旅所ヘ渡シ奉ル 口實曰以婆利采女神與號上御前以牛頭天王八大王子兩神與號下御前者昔洛中疫神鎮祭之年上京之男女六月七日別婆利采女神與而奉遷幸於上京而奉置神與二條烏丸少將井之尼之家故以婆利采女之神與號少將井殿號上御前又牛頭天王同八大王子神與者天延二年如舊例以高辻東洞院助正宅定御旅所號大政所又號下御前者以分少將井殿別所也少將井尼後拾遺集之作者也

(山城名勝志十四) 祇園御旅所 元在烏丸東高辻北大政所町亦少將井御旅所在烏丸東冷泉北 案今旅所在四條京極東是豐臣秀吉公時所遷也 舊地東洞院五條坊門南也

(拾遺都名所圖會一) 牛頭天王社 烏丸通高辻の北に大政所町大膳院の内にあり古祇園の御旅所也中頃秀吉公の母堂大政所の第あり

(山州名跡志十七) 大政所町 在烏丸通佛光寺南此頃秀吉公の母堂大政所の第あり
(明月記) 建永二年六月十四日曉女房等令參祇園旅所云々五條坊門烏丸大政所旅所
(百練抄十五) 寛元四年六月六日癸巳有炎上事起四條坊門町及五條坊門邊此内六角堂因幡堂祇園旅所等燒亡了

(祇園社舊記) 祇園社領境内敷地畠等并旅所敷地高辻北烏丸東 一保四町 事任御書之旨早可被沙汰付寶壽院法印顯深代依仰執達如件

至德二年十二月廿一日

左衛門佐花押

山名彈正少弼殿

(祇園社本緣錄) 後小松院至德二年十二月廿七日祇園御旅所自今以後寶壽院進止

ルニキノ旨勅裁アリ